
あなたと私の赤い糸

愛田雅

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

あなたと私の赤い糸

【コード】

N1935C

【作者名】

愛田雅

【あらすじ】

板屋真澄は幼馴染の植松由之にあこがれ続けていた。性同一障害である真澄は結ばれてはいけないと思いつつも由之の告白を承諾してしまい…。

星のふる夜

今宵の月は、極上の月。黄色い月の下、あなたは私を抱きしめる。太腕、厚い胸。小さいころから、ずっとあこがれていたあなたが、私を抱きしめている。

幼いころから二人でよく遊んだ公園は、私と植松由之　ゆうちやん　しかない。ゆうちゃんは、人通りの多い道路から私たちが見えないように、トイレの裏で私を強く抱きしめている。

「マーちゃんのことを、ずっと好きだったんだよ」

甘い声で、私に告白してくれる。こんな日が、来るとは到底考えられなかった。決して、私たちは結ばれないと、幼心にわかっていた。

しかし、ゆうちゃんは、今、こうして私を抱きしめ、告白してくれている。クリスマス前の寒空の中、お互いを温めるように、私たちは抱き合い、お互いの気持ちを体から確認しているようだ。

ゆうちゃんの胸は、とても温かい。温かそうな胸だとは、ずっと思っていたけれど、想像以上に温かい。外の気温は、10度を大きく下回っているはずなのに、寒さを全く感じることはない。

「寒くない？」

「ううん。大丈夫。ゆうちゃんは、寒くないの？」

「僕なら、心配しなくて大丈夫だよ」

私たちの家は、このすぐそばにある。だけど、二人きりになりたくて、私たちはなかなか家に帰ろうとはしなかった。もっと、ずっと、ゆうちゃんの側にいたい。このまま、二人きりでいられたら。

私の初恋の人、ゆうちゃんと永遠に一緒にいられたらいいのに。

この願いが、叶ってしまっていないのか。いいや、叶わない方がいい。私よりももっと素敵な女性と一緒にいたほうが、ゆうちゃんにとって幸せなはずだ。私は、小さなときからそう思い続けてきた。

「そろそろ、帰る?」

かれこれ一時間は、公園にいる。このままでは風邪をひいてしまいかもしれないと思い、ゆうちゃんに聞いた。

「……寒いかな?」

「うん……」

「そうか。じゃあ、俺の家に行こう。それで、温かいものでも食べて、ケーキを食べようか」

目の前にあるゆうちゃん的笑容。こんなに近くで見ているなんて、こんなに幸せなことはいわ。一生分の幸せを使い切ってしまった気分よ。

ゆうちゃんは、私が編んだ手袋とマフラーをしている。私は、同じ柄の色違いの手袋とマフラーをしている。そして、左手の薬指には、ゆうちゃんがさっきくれた指輪が光っている。分厚い手袋をはめた手で、手を握り、ゆうちゃんの家に向かった。

「指輪、ありがとう。死ぬほど嬉しかった」

「おいおい、大げさだな。でも、喜んでもらえて、僕も嬉しいよ。いつか、この気持ちを伝えたいって、思い続けていたから」

ゆうちゃん、ありがとう。その言葉だけで、嬉しいよ。

この幸せは、きつと永遠には続かない。わかってるんだ。私たち

は、ずっと一緒にいてはいけないんだ。まだ、ゆうちゃんには言っていないけれど、私たちは決して結ばれてはいけない。握っている自分の手に、力を入れていいのか迷い続けている。ゆうちゃんは、しっかりと私の手を握ってくれているけれど、私は軽く握ることしか出来ない。

私の中の罪悪感。近いうちに、あのことをゆうちゃんに言わなくてはならない。

「今日は、星がきれいだな」

何も知らないゆうちゃんが、空を見上げて話している。どうしようという気持ちで、私はほとんど落ち着きがない。どっしりとしたゆうちゃんに、どんどん動揺していつてしまう。

「ゆうちゃんは、星が好きだもんね」

小さいころから、ゆうちゃんは星が大好きだ。星座早見表を小学生のときに買ってもらった、あのときの喜びようはすごかった。

真向かいに住む私に、おおはしゃぎで、バルコニーから大声を出して早見表を見せてくれた。

私は、あきれるでもなく、ゆうちゃんが心のそこから喜んでいる姿を見て、こちらまで自分のことのようにうれしくなってしまうた。

それから、高校受験に合格すると、ご両親から天体望遠鏡を買ってもらっていた。バルコニーで、毎日のように、星を見ていた。向かいから、その姿を眺めるのが、大好きだった。真剣な表情で、望遠鏡を覗き込むゆうちゃんに、男らしさを感じた。

時には、私を手招きしてくれることもあった。家族同士、仲がよかったので、躊躇することなくゆうちゃんの部屋に行き、二人で望

遠鏡をのぞくことも多かった。

高校生のゆうちゃんは、背も高く、手も大きかった。足だってそうだ。ゆうちゃんの家の玄関の大きな靴を見ては、ドキッとしたりした。ゆうちゃんの横に並び、その背の高さを感じては、またもドキッとしたものだった。

そんな私の気持ちに、気付いていたのだろうか。

「今日は、雲がないから、うつすらと冬の大三角形がわかるぞ」

「え、どっ？」

「ほら、あそこ」

そう言つとゆうちゃんはぐいと私の腕をひっぱり、私の目の前で指差した。

「あの一番きれいに光っているのが、おおいぬ座だよ。その斜め左上にこいぬ座、その右側にオリオン座があるだろう？」

そう言われても、私には一番きれいに光っているおおいぬ座くらいしかわからない。目で、一所懸命に他の二つの星を探しているとゆうちゃんはもう一度、丁寧に説明してくれた。すると、ようやく冬の大三角形を確認することが出来た。

「へへ、きれいだね」

「だろ？」

ゆうちゃんは、ちよつと自慢げに言った。星だけは、誰にも負けたくない気持ちで、強いんだろ。だから、私は星の勉強は一切しなかった。

星座に関する本をたくさん買って、全部読んでいたゆうちゃん。興味深そうに、一人部屋の中で本を読んでいる姿を、自分の部屋から眺めては、心を奪われていた。きつと、私にそんな姿を除き見られてたなんて、気がついていないだろうけど。ちよつと鈍感なところが、私の母性本能をくすぐる。

「ゆうちゃん、ありがとう」

さつき、告白してくれたことを思い出しながら、そう言った。ゆうちゃんは、きよとんとして私の顔を覗き込もうとしている。

「何だよ、いきなり」

「さつき、告白してくれたでしょう。私、本当に嬉しかったんだ」

にやけた顔で、私の手を強く握り返してくれた。

公園には、待ち合わせをしていた。向かい同士に住んでいるのに、変だなんて思ったけれど、たまにはそういうのもいいかもしれない。と思って、ゆうちゃんの提案に応じた。

小さいころから、二人で遊びに行った公園には、午後6時に集合した。時間厳守で、私はぴつたりを狙っていた。今日のために編んだ、手袋とマフラーを近所の雑貨屋で買った紙袋に入れて、風で吹き飛ばされないようにと、用心しながら紙袋を持っていった。

公園に着くと、一人ベンチで貧乏ゆすりをしながら、ゆうちゃん が待っていた。貧乏ゆすりなのか、寒さで震えているのか。もしも、後者であるならば、早く私が編んだ手袋とマフラーをして欲しい。

「ゆうちゃん！」と、大きな声で呼び、手をふりながらベンチに向

かかと、ゆうちゃんはすつくと立ち上がり、コートに突っ込んでいた手を出して、私に手を振り返してくれた。

「ごめん、待った？」

明らかに、待ったと思われるけれど、ゆうちゃんは何も言わず、ただ笑顔を私にくれるだけだった。ゆうちゃんが座っていたベンチに、並んで座り、早速、私は自分が編んだ手袋とマフラーを紙袋ごと渡した。

紙袋を覗くと、その瞳が驚いていた。手袋とマフラーを片手で全部、出してしまうと、私の手袋とマフラーと、手に持っている手袋マフラーを交互に見ていた。

「これって、もしかして、色違いなのか？」

「うん、そうだよ」

同じ柄だけど、色違いで、一見パールックっぽくない感じにしたけれど、すぐにわかってしまったらしい。昔から、ゆうちゃんとおそろいのものが欲しいと思っていたから、色違いのものを編んでしまった。

不信な顔をしているゆうちゃんに、やはり、色違いじゃない方がよかったかなと、後悔した。

ゆうちゃんは、何も言わず、マフラーを首に巻き、手袋をはめると、手を広げてこちらに見せると、にっこりとした。

「喜んで………くれた？」

「もちろん」

子供のころと変わらない、目を細めた笑顔を見せてくれた。ゆうちゃんは、喜んでくれている、その顔ですぐにわかった。

「俺も、渡したいものがあるんだ」

そう言うと、一度はめた手袋をはずして膝に置き、コートのポケットに手を入れてがさがさ何かを出そうとした。じつとそちらを見ていると、コートからはリボンのかかった小さな箱が出てきた。そのまま、それを私の顔の前に持ってきた。

「これ、プレゼント」

「……………」

目の前の箱を受け取り、「開けていい?」と聞くと、「良いよ」と言われたので、リボンを解き、箱を開けてみると、銀色に輝いた指輪が入っていた。ハートの石がとてもかわいらしく輝いている。

「これ……………」

高価そうな指輪に、本当にもらっていいものだろうかと心配になつてしまった。ゆうちゃんを見ると、私の驚いた表情に余裕の笑顔を浮かべていた。

「俺の気持ちなんだ。受け取って欲しい」

力強く私を見つめてそう言うと、私の左手を取り、手袋をはずすと、何も言わずに左手の薬指にその指輪をはめてくれた。サイズはぴったりで、きれいに私の指にはまってくれた。

「本当に、いいの? こんな、高価なものを……………」

「良いんだ。ずっと、僕の気持ちを伝えたかったんだ」

そこまで言うと、体をこちらに向けて、私の目をまっすぐに見つめた。

「マーちゃん、僕、ずっと、マーちゃんのことを、好きだったんだ」

絶対に、その口から聞くことがないと思っていた台詞だった。全く想像していなかった台詞に、私は口をぼかんと開けてしまった。

ゆうちゃんの周りが、一面バラ畑に見えた。私たちは、バラに囲まれている、そんな錯覚を覚えた。体中の力が、一気に抜け、倒れてしまいそうだった。

ギョウっと、次の瞬間、強く私を抱きしめてくれた。

ゆうちゃんのぬくもりを感じていると、公園の外に目を移した。

夜だというのに、案外人通りが多い。

「ねえ、ゆうちゃん」

「ん、どうした？」

私の体から、ゆうちゃんが離れた。

「こんなところじゃ、人に見られちゃうよ」

「あ、そうか……」

私の言葉に、興奮から醒めたのか、公園を見回した。その間に、私は指輪の箱の中にリボンをたたんで入れて、コートのポケットにしまった。手袋をはめていないと、すぐに手が冷たくなってしまったので、指輪をはめたまま手袋をはめた。

突然、私の手を握り締めると、ゆうちゃんは道路から唯一死角になるトイレの裏に私を連れて行った。そして、思い切り私を抱きしめてくれた。

このことは、一生忘れることはないだろう。私の人生で、最大の宝物になると思う。それくらい、嬉しかった。

「ねえ、ゆうちゃん、どうしてゆうちゃんは、一人暮らししないの？」

私は、何度もゆうちゃんに同じ質問をしていた。大学を卒業しても、ゆうちゃんは実家に居座り続けている。男の人って、実家から離れたがるのに、ゆうちゃんは全くそれらしいそぶりすら見せない。そこで、何度となく同じ質問を繰り返していた。

「それは……」

すると、決まって真剣な顔で私をじっと見つめてきた。私の中の罪悪感が、耐えられなかった。そんな目で、見ないで。

ゆうちゃんから目をそらすと、それ以上、何も話してはくれなかった。

同じ質問をすれば、同じことが繰り返される。わかっているはずなのに、私は、同じ質問を繰り返してきた。

そして、もう一度、同じ質問を投げかけた。

「また、その質問だな。毎回、僕に答えさせてくれなかったからな。今日は、ちゃんと答えられそうだな。僕が、実家を出ないのは、マ―ちゃんの側を離れたくないからだよ」

わかっていたはずなのに、面と向かってちゃんと言われると、体がカーッと熱くなってきた。恥ずかしくって、背中がもぞもぞす

る。

本当は、もっと早く言って欲しかったくせに、ずっと逃げてきた台詞だった。ゆうちゃんの実行を見れば、私の期待していることを言ってくれるだろうって、思っていた。それが、ついに、現実となつてしまった。

今年は、弟が、結婚して家を出てしまった。仲がよく、面倒を見続けてきた弟が、とうとう誰かのものになってしまったんだ。いつかは、こんな日が来るとわかっていた。けれど、実際に弟がいなくなる、想像以上に寂しかった。向かいの家には、ゆうちゃんがいるのに。

それが、引き金になってしまったんだ。小さいころから、引き出しの奥にしまい続けてきた気持ちを、出してしまった。

だったら、もう一つ、隠し続けてきたことも、出さなくてはならない。一緒に、出さなくてはいけない、私の秘密。

「どうしたんだよ、自分から聞いておいて、顔を真っ赤にしちゃつてさ」

嫌だ、顔が赤くなっていることをゆうちゃんに知られてしまった。私が、それを気にしていることも知らずに、ゆうちゃんは少し照れくさそうに笑っている。

ムードが、すごく朗らかだな。これじゃ、まじめな話がしづらいじゃない。

「さ、着いた」

そう言うと、ゆうちゃんは私の手を離し、さっさと家の中へと入

あなたと私の赤い糸

ってしまった。少し後から、私もゆうちゃんの家に入った。

私の秘密

クリスマスの告白が過ぎ、私たちは本格的に恋人同士になった。ゆうちゃんは、相変わらず私をマーちゃんと呼んでいる。「真澄！」とは、呼ばない。私も人のことは言えないけれど。

隠し続けている秘密を、どうやってゆうちゃんに伝えようか迷っていた。自分だけでは、思いつかない上に、決心もつかないので、小学校時代からの親友に相談することにした。

十河まどか　いつも、まどかと呼んでいる　は、小学校の同級生で、何でも相談する仲だ。小柄で、女性らしい細い髪の毛が、小さいころからずっと羨ましくて仕方がなかった。

大人になっても、まどかは私の友達でい続けてくれている。ゆうちゃんのこと、いろいろと相談し続けていた。まどかは、告白することを勧め続けてきた。でも、全く決心がつかず、自分から告白することはなかった。それだけじゃない。まどかは、秘密も早く打ち明けた方がいいとまで言ってくれた。私にとって、愛の告白以上に厳しいと思われる告白だ。どうしても、踏ん切りがつかない。

「真澄、好い加減、言わなきゃだめだよ！」

待ち合わせをしていた喫茶店に入ると、まどかは、真っ先にそう言ってきた。しかも、興奮している。ずっと、ゆうちゃんの相談をしてくれていたから、ゆうちゃんと付き合い始めたと知って、早く秘密を打ち明けなくちゃいけないと、私以上に思っているに違いない。

「付き合っちゃったんでしょ？　あのことがばれるのって、時間の問題だと思わない？」

まどかは、出された水を一口飲むと冷静に、そう言った。メニューを取り出して、さっさと注文するものを決めてしまった。慌てて私も、メニューを広げた。

「それにしても、よくこの年までばれなかったわね。彼氏は、全く気がついていないんでしょう?」

「うん、そうだと思うよ。全然そのことに触れてこないしね」

ゆうちゃんだけが、知らないんじゃない。ゆうちゃんの家族も知らないはずだ。向かいにゆうちゃんたちが引越してきたのは、私が性同一障害だとわかった後だった。だから、きっと知らないはず。

「でも、よかったよね。真澄のお父さんが、桑田のファンで」

「そうだね」

私は、男とも女とも取れるような名前、真澄だ。それは、お父さんが桑田のファンで、子供が出来たら絶対にこの名前を付けると言っていたそうだ。ちなみに、弟の名前は、薫。

男性として、私は生まれてきた。しかし、自分が男だと思ったことは一度もない。幼心に、自分の体に違和感を覚えていたことは、今でもはっきりと覚えている。

どうして、お母さんと同じ形をしていないのか。ずっと疑問に思っていた。ズボンをはくことにも抵抗を感じていた。他の女の子たちのように、私のスカートがはきたいって思っていた。

そのことを両親に告げると、地球に隕石がぶつかる以上の衝撃を

感じていただろうと思われるほどの表情をしていた。そして、私の言葉を全て否定したいと、言いたそうな悲しい瞳をしていた。

すぐに、病院に連れて行かれ、私は性同一障害という診断を下された。あのときの、両親の落胆した顔は、一生忘れることはないだろう。涙こそ見せなかったけれど、背中が泣いていた。その背中を見るのが、死ぬほど辛かった。

小学校にあがるころ、向かいにゆうちゃんたちが引っ越してきた。あいにく、私たちの家の間を通る道路が、学区の境界線となっており、私たちは別々の小学校・中学校に通うことになってしまった。でも、それでよかったと思った。

小学校に入ると、両親の願いを受け止めてくれて、私は女子として小学校生活を送ることが出来た。男女の体の違いが始める年までは、私が男であることは隠しておしてきた。体育の時間の着替えは、さほど苦労することはなかった。プールの時期には、水着に着替えたが、タオルで体を上手く隠していたので、誰にも気付かれることはなかった。

一所懸命に、自分が男であることを隠し続けてきたけれど、体が男らしくなってしまうころになると、自分が男であることを公表することにになった。

本当は、言いたくなんてなかった。自分が男だとは思っていないかったんだ。クラスのみんなに、自分が男であると告げることは、崖から身を投げるようなことであつた。

心臓が破裂しそうなほどに緊張しつつ、自分が男であることを告げたのだが、以外にもクラスメイトの反応は、特になく、「それで？」というような表情をするだけだった。男だと言っただけけれど、そ

れまでと変わらず、私は女子として扱われ続けることが出来た。

しかも、いじめられると思っていたのに、一部のクラスメイトが、「オトコオンナ」と数回言われた程度で、仲のよい女子たちが、私をかばってくれたので、そんな子供じみた 子供だから仕方がないかもしれないけれど ことを言うクラスメイトは、自然といなくなっただけだった。

中学も高校も女子として受け入れてくれた。しかし、体は男なので、先に性同一障害だということをおいておいた。テレビなどでも、性同一障害の人を特集したりしてくれた事もあつてか、誰一人、私を男として見ることはなく、いじめられることもなく、幸せな学生生活を送ることが出来た。

まどかはアイステイーを、私はアイスコーヒーを頼んだ。

「早めに言った方が、彼氏にとってもいいことだと思うよ」

「うん、そうなんだけどね……」

本当に、そうだと思う。私自身、ずっと早いうちに言った方が良かったらと思うていた。だけど、言えなくて、ずるずるとここまできてしまったんだ。言おう言おうとしていたけれど、言えなかったら意味がない。現に私たちは、恋人として付き合い始めてしまっている。

「そうやって、いつまでも逃げ続けるわけにはいかないでしょう？」

いつまで、私は逃げ続ける気だろう。届けられたばかりのアイスコーヒーに、ガムシロップを注ぎいれ、完全にガムシロップが溶け

るまで、無言でかき混ぜ続けた。

「小さいころから、お互いを知っているわけだし、彼氏はきつと、真剣な気持ちで真澄と付き合っているんだと思うよ。その先の話も、近いうちに出るんじゃないかな」

その先ということは、結婚ということになるだろう。確かに、ゆうちゃんのお嫁さんになることは、私の小さなころからの夢だった。叶わぬ夢であると、自分に言い続けているが。

法律も改正されて、私は戸籍を女性に変えることが出来る。今のままでは、無理だが。全く手術というものをしていないのだ。例えば、手術をしたとしても、それは外見を変えるだけで、男性を全く消すことは出来ない。

第一、ゆうちゃんは大の子供好きだ。いとこに子供が出来たとき、自分の子供が生まれたかのように、誰よりも喜んでいた。自分の子供だって、絶対に欲しいに決まっている。私が、女性として生まれていたら、絶対にゆうちゃんの子供を産んであげたかった。でも、私には出来ない。心の優しい、ゆうちゃんの遺伝子を私は産むことが出来ないんだ。

「早く、言わなくちゃだめだよ。これ以上、逃げ続けるなんて、きつと無理だよ」

涙混じりにそう言うと、こわばった表情だったまどかが、穏やかな目に変わった。

「うん、辛いことだとは思っけど。ずっと側にいられた二人だから、乗り越えられると思うよ」

「ありがとう」

そうは言ってみたものの、ちゃんとと言えるかどうか、全く自信がなかった。

喫茶店を出ると、すぐにまどかと別れた。まどかは、これから旦那さんのために夕食を作らねばならず、忙しいといって、急いで帰ってしまった。旦那さんか……。本来なら、私が誰かの旦那さんになるはずだったのに。

夕方の空は、焼けていた。この空を、何回ゆうちゃんと一緒に見ただろうか。からの鳴き声さえも、今の私には悲しく聞こえた。ゆうちゃんと一緒にいるときは、なんとも思っていなかったのに。

次に会ったときに、言えるだろうか。人と言う字を三回手のひらに書いて飲み込んでも、まだ消えないくらい緊張をするだろう。そんな中で、大事な秘密を打ち明けることが出来るのだろうか。

恋人同士

まどかに釘を刺されたのに、なかなかゆうちゃんに大事な秘密を言えないでいる。私は、男なのって、一言伝えるだけなのに。その一言が、どうしても言えなかった。

告白をされた日以来、私たちは毎日会うようになった。休みの日には、必ず二人でどこかへ出かけた。特にプラネタリウムに行くことが、一番多かった。他にも、映画を見たり、ボーリングやカラオケ、買い物にも行ったりした。夜は、ゆうちゃんの宝物の望遠鏡で天体観測をした。

そして、毎朝、私たちは手をつないで駅まで一緒に行く。付き合う前から、一緒に朝は駅まで行っていたけれど、付き合ってから手をつなぐのを当たり前のようになっていた。手袋をはめてはいるけれど、手袋から、ゆうちゃんのぬくもりはしっかりと感じられた。ふんわりと私の手を覆う、大きなゆうちゃんの手に、毎朝、パワーをもらっていた。

帰りも一緒に帰れるときは、駅で待ち合わせをして、家まで一緒に帰った。帰りも、必ず手をつないでいた。ゆうちゃんのぬくもりに、私は甘えていた。そのぬくもりにはまると、そこから出たくなーいと思ってしまう。わがままな自分が、ひょっこりと顔を出してしまふのだ。

大事なことなのに、いざ、ゆうちゃんを前にすると、全くそれらしき言葉すら言わないでいる。「私は卑怯だ」と思いながらも、しっかりと手はゆうちゃんの手を握り続けた。

就業時間を終え、会社を出ると、タイミングよく携帯が鳴った。ゆうちゃんからだ。毎日、この時間になると、必ずゆうちゃんは電話をくれる。あらかじめ、手に持っていた携帯に余裕を持って出た。

「もしもし、ゆうちゃん？」

「マーちゃん、今日は一緒に帰れる？」

「今、会社を出たところだよ。一緒に帰ろう」

大事なことを言わなくてはならないとわかっているのに、上ずった声でゆうちゃんと話をしてしまっている。

寒空の下、素手で携帯を握り締めて、ゆうちゃんの声を注意深く拾った。街は、ざわめいていて、携帯から漏れるゆうちゃんのを掻き消そうとしているようだった。

携帯を切ると、待ち合わせの地元の駅へと向かった。どこによるでもなく、ただただ、ゆうちゃんに会いたい一心で、電車に乗り込んだ。帰宅ラッシュの電車の中は、くらくらししてしまいそうだ。もともと人ごみは、苦手だけれど、こればかりは仕方がない。つり革につかまって、窓に映る自分の顔を確かめた。疲れた顔でゆうちゃんには会いたくないから。

地元の駅に着くと、まだ、ゆうちゃんは着いていなかった。改札の前でゆうちゃんが来るのを待つことにした。駅前は、家路を急ぐ人たちで騒がしかった。部活帰りの疲れた足取りの高校生や、サラリーマンやOLが我先にと、駅に吸い込まれたり、駅から吐き出されたりしている。

その中に、小さな子供が含まれていた。母親の手をしつかりと握り締め、幼稚園の黄色いかばんと帽子が、とても愛らしい。ぎよろついた目で、こちらを見たので、私は思わずニコツと微笑んでしまった。その子供は、無表情のままこちらをじっと見つめると、母親に強く手を引かれて改札の中へと入っていった。

「お待たせ」

背後から、ゆうちゃんの声がした。

「かわいいよな」

目じりを下げて、先ほど私が見ていた幼稚園児を、ゆうちゃんはいとおしそうに目で追っていた。私が、その子供を見ていたところを見られてしまったのかもしれない。

私の気持ちに全く気がついていないようで、ゆうちゃんはいつものように私の手を握ってきた。そのまま握り返したくない気分だったが、いつものくせで握り返してしまった。今日もゆうちゃんの手は、温かい。

「今度の週末は、どこに行こうか？」

のほほんとした表情で、ゆうちゃんは言った。

それどころじゃないんだよ、ゆうちゃん。大事な大事な話があるんだ。そう心の中で言ったものの、口に出してはなかなか言えなかった。

ゆうちゃんの横顔。夕日を浴びて、少し赤く頬が染まっている。

それでも、男らしく凛としたその瞳は、私の心を離さないでいた。

「マーちゃん、特に行きたいところはない？」

「え、そ、そうだね……。それより、話したい事が……」

覚悟を決めて、話そうと思ったそのとき、

「あら！」

最悪な事態が起きた。私たちが、固く手をつないで歩いていると、正面からゆうちゃんのお母さんが現れたのだった。

急いで、私は手を離した。

「いつの間に、そういう仲になっていたのかしらね」

怪しいものを見る目で、ゆうちゃんのお母さんは私たちを見ていた。手をつないでいたところを、ばっちり見られてしまったみたいだ。

「いつかは、二人がそういう仲になるんじゃないかって、思っていたのよ。由之もようやく、決心がついたみたいね」

その言葉に、ゆうちゃんは頭をかいて照れ笑いを浮かべた。

「いやだなあ。母さん、変なこと言って」

「良いじゃないの。私たちの孫が見られる日も、そう遠くはないみ

たいね。じゃ、私は用があるから」

軽く会釈をすると、ゆうちゃんのお母さんは、駅のほうへと向かっていった。駅前のスーパーの特売にでも行ったのだろう。今朝、新聞の折り込みチラシに、駅前スーパーでしようゆの特売があると書いてあった。

「孫だつてさ」

私とは、全く違う視点を持っていたようだ。ゆうちゃんは、離れた手をもう一度握ってきた。私は断るでもなく、また、その手を握り返してしまった。

小さいころからあこがれ続けてきたゆうちゃんの手だ。一秒でも長く、触れていたい。でも、本当のことを話したら、もう握ってはくれないかもしれない。例え、握ってくれたとしても、もう素直に握り返すことは出来ないかもしれない。

「マーちゃんも、子供は好きだよね？」

確認するように、聞かれてしまった。危ない雰囲気立ち込めてきた。このまま話をすすめたら、本当に「結婚」の二文字が出てきてしまうかもしれない。早く、私が男だと言わなくてはならない。

「それよりも……」

「何、どうかしたの？」

ゆうちゃんを見つめてそう言うと、見つめ返されてしまった。ドキツとして、一瞬心臓が止まったような気がした。その瞳に抱きし

められると、大事な言葉が出てこなくなってしまう。愛しすぎるその瞳で、私を見つめないで欲しい。目でそう訴えてはいるものの、ゆうちゃんも瞳はじっと私を抱きしめ続けた。

「いや、あの……」

耐え切れなくなり、視線をはずした。ゆうちゃんの手を離し、手を組んだ。

「マーちゃん、何かあったの？」

私はこんな態度をゆうちゃんに見せたことがなく、ゆうちゃんは心配しているようだ。このまま洗いざらい言ってしまうおつと思うのに、強気な心と臆病な心が交差する。

告白された公園を通り過ぎると、私たちの家までは、ほんの数分で着いてしまう。ゆっくり歩こうとしているのに、なぜか足は速く歩きたがっている。今日できることを、明日に延ばそうとしている。一体、何回同じことを繰り返してきただろう。

言わなくちゃ。何度も自分に言い聞かせるが、とうとう家に着いてしまった。何も言わずに、私はそのまま家に入ろうとした。今日の自分の行動が、恥ずかしくてたまらなくなったのだ。他の人から見たら、何ともないことに思いかもしれない。だけど、私にとっては大決心であり、それが出来ない自分がすごく嫌で仕方がない。こんな私を、ゆうちゃんに見せたくない気持ちになった。

家のドアに手をかけると、私の腕をつかみ強く私を振り向かせると、私の頬にゆうちゃんはキスをした。ハツとした私は、周りを見回した。人影すら見えず、その光景は二人だけのものだったと確信

した。

「また、明日な」

心配しているはずなのに、笑顔を見せて、ゆうちゃんは家の中に入って行ってしまった。その背中に、「ごめん」と言った。

次の日の朝になると、何事もなかったかのように、私たちは手をつないで駅へと向かった。ただ変わったことと言ったら、「結婚」と言う言葉を私が避けているのがわかったのか、ゆうちゃんは子供を見ても何のリアクションもとらなくなっていた。

私の会社の社長は、私と同じ病気の性同一障害の男性だ。今は、女性のなりをしているけれど、もともとは男性で、私と同じ境遇を経験している人だ。社長も手術はしておらず、戸籍上は男性のまま手術をする気があるのだろうかと思っではいるけれど、突っ込んだ話をしたりはしなかった。

社長には恋人がいるらしいという噂を耳にしたことがある。もし、それが本当なら、今の私の状況を理解してくれ、相談に乗ってもらえるかもしれないと思った。今まで、深い話をしたことがなかった人間が、突然、重たい相談をもちかけても平気かなとは思ったけれど、社長の人柄を信じて、ゆうちゃんの事を相談することにした。

今日は、社長と二人でミーティングをすることになっていた。会議室で二人きりになれる。

仕事の打ち合わせをすんなりと終わらせると、席を立とうとする

社長を呼び止めた。

「あの、ちょっと良いですか？」

「何かしら？」

「プライベートなことで申し訳ないんですけど……」

申し訳なさそうに、もじもじしながらそう言うと、社長は「何でも言つて頂戴」と目で言つてくれた。それに甘えて、私はゆうちゃんとのことを話し始めた。私の言葉に社長は、うんうんと頷いては、親身になって聞いてくれた。

「そうだったの。最近、きれいになったなと思っていたのよ。男がいたのね」

弱みでも握つたと言う嬉しさの表情ではなく、安堵したような表情をしていた。机の上においていた私の手の上に、そつと手を置き、社長が上目遣いで、私を見つめた。

「自信を持つて。ずっとあなたを、見てきてくれた人なんでしょう？」

ずっと私のことを見てくれた人。誰よりも、私の側にいてくれた人。それが、ゆうちゃんだ。なのに、私が男だと言うことを、まだゆうちゃんには知らない。それって、矛盾しているような気がした。

「案外、板屋さんが思っているよりも、簡単なことだと思うわよ。私だって、彼氏がいるんですもの。最初は、私を女だと思って近付いてきたけれど、男だと知ったからって何も変わることはなく、そ

のまま付き合い始めた人だっているのよ。板屋さんの彼氏は、ずっと板屋さんの側にいた人なんだもの、すんなりと受け入れてくれると思うわ」

社長は、それから実体験を話してくれた。私は、黙ってそれを聞いていた。だんだんと自信がわいてきた。男と知っても、ちゃんと女性として接してくれる男性がいるということに、安堵した。それと同時に、大事な問題が浮上してきた。

「でも、例え女性として私を受け入れてくれても、私は、彼の子供を産むことは出来ません」

私が言うと、これには、流石の社長も困惑した顔を見せた。

「確かにそうね。だけど、板屋さんのことを大事に思ってくれているようだし、子供はあきらめがつくと思うんだけどな」

「もし、彼が子供をあきらめたとしても、私があきらめられないよ。うな気がするんです。あんなに素敵な人は、この世に二人といない。だからこそ、彼の子供を産んであげたいって。でも、私にはそれが出来ない」

体がじんわりと温かくなってきた。こみ上げてくるものを感じる。と、急いでそれを飲み込もうとした。飲み込んでも、飲み込んでも、こみ上げてくるものはあとをたたなかつた。

女性として生まれていれば、ゆうちゃんの子供を産めたのに。女性を見るたびに、自分が男性として生まれてきたことを悔やんだ。

不妊症に悩む女性だって、たくさんいる。しかし、私はそれ以前

で、生まれながらにして子供を産むことは出来ないのだ。心が女性でも、体も女性でなければ、子供は出来ない。最愛の人の子供を意味したいと願う女性の気持ちは、痛いほどよくわかる。

どんな治療を受けたところで、ゆうちゃんの子供は産んであげられない。実際に、ゆうちゃんと付き合ってから、このことを真剣に考えるようになった。もっと早く、真剣に考えていれば、付き合うこともなかっただろう。傷口を広げることをしなくてもすんだのに。

告白のとき

引き出しには、クリスマスプレゼントにゆうちゃんからもらった指輪が入っている。週末に、ゆうちゃんと会うとき以外は、いつもここにいる。はめるときは、いつも自分で左手の薬指に、ためらいながらはめている。

もらってすぐのときは、毎日のように、引き出しを開けては、指輪を箱から出して、にやけた顔で眺めていた。次第に、「結婚」を意識するようになり、引き出しを開ける回数は減っていった。今では、週末くらいしか開けなくなっている。

たくさん、ゆうちゃんと話はしてきたけれど、性同一障害の話をしたことはなかった。男性が女性の格好をすることに着いての話さえ、出てくることはなかった。ゆうちゃんの家族も同じだ。

トントンと、私の部屋をノックする音が聞こえてきた。時計を見ると、夜の9時を回ったところだった。

「誰？」

「ちょっといいかしら？」

母がやってきた。ドアが開き、母を見ると、あまり機嫌のいいようには感じられなかった。

「どうかしたの？」

首を傾げて訊ねると、黙って母は、床に座った。私は、ベッドに

軽く腰掛けた。

「今日、道端で由之君のお母さんに会ったんだけど。真澄、由之君と付き合っているって、本当なの？」

「う、うん……」

私は、まるで嘘がばれた子供のようにそう応えるのがやっとだった。これは、嘘に入るのだろうか。ゆうちゃんとの事は、怖くて母にはとてもじゃないけど、言うことが出来なかった。とうとう、母の耳にも入ってしまった。

いつかは、ばれてしまってもおかしくはなかった。家の近所で、仲良く手をつないで毎日歩いているのだから、ばれない方がおかしいくらいだ。

「由之君は、真澄が男だと言うことは、もう知っているの？」

「まだ……、言っていない」

「そう」

全く母の目を見なかった。母は、力のない言葉を私にかけた。

「由之君は、真澄との将来をどう思っているのか、言っていたの？」

私は、黙って首を横に振った。

「まさか、あなたたちがそういう仲になるなんて。こんなことになるのだったら、最初から真澄が男であると言っておいた方が、よか

「ったわね」

「両親は、私に気を使って、私を娘として育ててくれた。」

私が幼稚園に通っていた頃、父が転勤することになり、ゆうちゃんがいるこの町に、一家そろって引越してきた。近所の人には、私は女の子であると伝えられた。そのことが、幼い私にとっても嬉しかった。

由之と言つ名前にもかかわらず、「ゆうちゃん」と両親から呼ばれていた。それを聞いて、私も「ゆうちゃん」と呼ぶようになった。

小学校高学年のころには、「由之」と両親は呼ぶようになっていったが、私は変わらず「ゆうちゃん」と呼び続けた。全く同じ事が、ゆうちゃんにも言える。私は、小さいころは「マーちゃん」と両親から呼ばれていた。小学校に入学するころには、「真澄」と呼ばれるようになっていた。ずっと呼びなれていると言つことで、ゆうちゃんは今でも「マーちゃん」と私のことを呼んでくれている。

「由之君もいい年なんだし、早めに本当のことを言つた方が良くわ
よ」

「………そうだね」

濡れる声を押し殺した。母に、ゆうちゃんを深く愛していることを悟られたくはなかった。しかし、私の意に反して、私の声は震えていた。眉間にしわを寄せる母の顔を見て、自分の気持ちを悟らせてしまったのがわかった。

「自分で言えないようだったら、お母さんが話そうか？」

「いい、自分で言うから」

好意とは言え、母に言っただけで欲しくはなかった。大事な話だ。自分の口で言いたい。私の気持ちを伝えるには、私自身の口で伝えなくては。逃げて逃げて逃げての繰り返しだったけれど、他の人の力を借りて、伝えたいと言う気持ちにはなれない。

一番好きな人に、私の全てを知ってもらうんだ。自分で言わなくちゃ、一生後悔してしまうだろう。

次の週末は、ゆうちゃんの家遊びに行つた。ゆうちゃんの家は、おらず、二人きりになった。洋風のインテリアに囲まれた、モダンな感じの家。壁は全て白く塗られ、清潔感に満ち溢れている。フロアリングの廊下を通り、太陽の日差しがたっぷりと注がれているリビングに入った。広いリビングには、ソファもダイニングテーブルもある。道路に面した窓からは、冬の混じりけのない空気と太陽の匂いが入ってきた。

「座って」

ゆうちゃんに促されると、汚れがつきにくい加工のしてある真っ白い革張りのソファに、ゆうちゃんと二人で座った。

少し距離を置いて座つたのだが、ゆうちゃんは座りなおして、私にぴたりとくっついてきた。私の肩に腕を回し、優しく髪を撫でる。

目の前には、電源が入るのを待っている大画面のテレビが、私たちを映し出していた。テレビ台には、ゆうちゃん一家を記録したD

V Dが並んでいる。「ゆうちゃんはじめての運動会」「由之小学校卒業式」など。他にも、ゆうちゃんのお姉さんのDVDもある。

深い愛情に包まれて、幸せに生活してきたことが、一目でわかる。ゆうちゃんが女性と結婚して、子供をもつて、この家に絶え間なく笑い声であふれていることを、ゆうちゃんのご両親は思い描いていたに違いない。

優しく私の肩をさすっているゆうちゃんだって、同じ事を考えていたと思う。どこにでもある、いわゆる普通の家庭を目指していただろう。ゆうちゃんは努力家ではあるけれど、冒険をするようなことはない。自分の目標のために、影で涙ぐましい努力をしていたのを、私は向かいの窓から、ずっと見続けてきた。

カーテンが閉まっけていても、灯りがついていると、勉強をしているんだなって思っていた。ゆうちゃんの部屋には、テレビはない。ラジカセはあるけれど、音が漏れたことはたまにしかなかった。私の部屋には、テレビがある。ためにテレビを消して、ゆうちゃんの部屋の音に耳を立てたことがあった。すると、しんと静まり返り、隣の駐車場にいますと思われる昆虫の鳴き声らしいものが聞こえるだけだった。

ゆうちゃんは、自分のひざに置いた私の手をぎゅっと握り締めた。その左手には、指輪をはめていない。今日は、指輪をはめなかった。ソファの横に置いてある私のかばんの中に、もらったときと変わらない状態で、思い出の指輪が入っている。後は、タイミングを見計らって返すだけだ。

「ちょっと、トイレ借りるね」

ゆうちゃんの優しい手を解きながら、私は言った。まるで自分の声ではないみたいで、誰かに言わされているような気分になった。

トイレに入ると、鍵を閉めて、深呼吸をした。息が詰まりそうだった。ゆうちゃんに触れられると、どうして良いのかわからなくなってしまう。自分を見失ってしまう。このトキメキが、たまらなく好き。こうなることは予測していた。

一度はまったら、二度と抜けられなくなってしまう。そんなことは、わかっていた。だから、ずっと逃げ続けてきたんだ。

一瞬の気の緩みとは言え、私はゆうちゃんを受け入れてしまった。絶対にはいけないと、自分に言い聞かせ続けてきたことなのに。付き合えば、必ず、自分が男であることを告げなくてはならないときが来ると、わかっていたのに。

いつまでも、付かず離れずの生ぬるい関係でよかった。緩く繋がっていれば、長くゆうちゃんのそばにいられると思っていた。

もう、生ぬるい関係ではないんだ。ゆうちゃんは、私に飛び切り優しくしてくれる。男らしいがっしりとした手で、私を受け止めてくれる。温かい腕に包んでくれる。さっきも、そうしてくれた。抜け出したくはないけれど、抜け出す決心をしたんだ。ゆうちゃんから、卒業する。私にとっても、ゆうちゃんにとっても、最善の方法だと思う。

何年か後、別れた事を正解だったと、笑って言えると確信している。ゆうちゃんは、女性と結婚して、子供をたくさん育てて、私と付き合ったことを昔話に出来るだろう。

私が、この世界のどこかで、その噂を耳にして、微笑んでいる画が浮かぶ。

トイレを出ると、ソファには座らず、その隣のダイニングテーブルを取り囲む椅子を一脚に座った。一連の私の行動を見ていたゆうちゃんは、怪訝な表情で何も言わずに私を見ていた。

「どうしたんだよ。こっちにこいよ」

腰をひねって、辛そうな体勢でゆうちゃんは私を呼んだ。私は、首を横に振って断った。

「あのね、実は、大事な話があるの」

人と言う字を三回手のひらに書いて飲み込んだりせず、本題に入ることにした。テーブルに置いた手を握った。じんわりと手のひらに汗をかいているのがわかった。小刻みに足が震えていると言うことも。このことに、ゆうちゃんが気付きませんように。気がついたら、きつと、私の隣に座ってしまっはすだから。隣に来られたら、それこそ、何も言えなくなってしまう。今の、中途半端な距離が、一番話しやすい。

「大事な話って、何？」

「うん……」

一つ息を飲み込み、いざ、話をしようとする、玄関が開く音がした。

「あら、真澄ちゃんが来てるのかしら」

ゆうちゃんのお母さんの声だった。今日は、ゆうちゃんの両親が結婚して家を出たお姉さんの家に遊びに行ったはず。夕方頃に帰ってくる、ゆうちゃんは言っていたのに、昼の1時に帰ってきてしまった。

ゆうちゃんの顔を見ると、焦っているようだった。予想外の出来事に、慌てているみたいだ。昔から変わっていない。ゆうちゃんは、アドリブに弱い。予想外の出来事に出くわすと、あたふたしてしまう。

「おかしいなあ。今日は、夕方まで帰らないって言ってたはずなんだけど」

ソファから立ち上がり、ゆうちゃんがそわそわしていると、ゆうちゃんの両親がそろってリビングに入ってきた。

「お邪魔してます」

私は、立ち上がって軽く会釈をした。

「いいのよ、座ってて。ゆっくりしてって」

ぐいと、ゆうちゃんはお母さんの腕をつかんだ。

「どうしたんだよ。今日は、夕方まで帰らないって言ってたのに」

「それがね、お姉ちゃんの旦那さんのお父さんが、急に倒れてしまつてね。急遽、予定が変わったのよ」

親子の会話を横で聞いていた。ゆうちゃんのお父さんは、手際よく私に紅茶を出してくれた。「お構いなく」と言ってはみたものの、「良いから、良いから」と笑顔を私に見せてくれた。言い辛い雰囲気になつてしまった。せつかく、今日、言おうと覚悟を決めてきたんだ。状況が変わつたからつて、ここで計画を変更してしまえば、また、覚悟を決めるまでに相当の時間がかかつてしまうだろう。こつなつたら、ゆうちゃんだけじゃなく両親にも言つてしまおう。

私は、静かに立ち上がり、親子三人の方に体を向けた。

「実は、大事なお話があるんです」

三人そろつて、きよとんとした顔で私の顔を見ると、そろつてダイニングテーブルを取り囲むように座つた。私の隣は、ゆうちゃんが座つた。私は、腰を降ろさず、立つたまま三人の方を向いた。

「どうしたの？」

お母さんは、訝しい顔つきで私を見ていた。お父さんもそうだが、ただ、ゆうちゃんの顔は見られない。

「ずっと、言わなかったことがあるんです。いつか、言わなくちゃと思つていた大事なことがあるんです」

怖い。ここから先の言葉を発してしまつたら、私たちの関係は、一体どうなつてしまうのだろう。全てが、一瞬にして粉々に消えてしまふかもしれない。小さいころからお世話になり続けてきた、ゆうちゃんたちと、もう二度と顔を合わせられなくなるかもしれない。

私は慌ただしく、両手を握つたり離したりを繰り返していた。無

事は、外からも丸見えなはずなので、かばんを持ったまま、慌ててカーテンを全部締め切った。

とうとう、言ってしまった。もう元には戻れないんだ。窓際に、ぺたりと座り込み。熱い雫を床に落とした。

もう会えない。大好きなゆうちゃんに、もう会えないんだ。

ポタポタと床に落ちた雫たち。かばんから手を離し、自分の顔を覆った。ヒックヒックと嗚咽が出て来る。止めたくても、私の体は泣く行為を続けてしまう。

ごめんなさい。ごめんなさい。何度謝っても、許してもらえないかもしれない。ゆうちゃんたちが、仮に許したとしても、私は、私自身を許すことが出来ないだろう。

意気地のない私は、ゆうちゃんに片思いをしていた。それだけで十分だと思っていたのに。自分で作ったルールに違反してしまったんだ。絶対に、ゆうちゃんとは結ばれないと。

私からは、一度もゆうちゃんに「好き」だとか、「愛してる」だとか言う言葉は言ったことがない。だけど、ゆうちゃんは、たくさん私に愛の言葉を与えてくれた。私のその瞳で抱きしめ、甘い言葉を与え続けてくれた。もう死んでもいいと思える瞬間だった。あまりにも嬉しくて、涙がこぼれそうになったことさえ会った。ゆうちゃん、私の全てなんだ。

誰よりも私に優しくしてくれ、愛を与えてくれた人。一番、失いたくなかった人だ。結ばれてしまったら、失ってしまうときが来るのはわかっていた。気の緩みとは言え、この間のクリスマス自分の

を呪った。一番やってはいけないことを、してしまったのだから。

涙は、止まってくれない。ベッドの脇に移動して、枕もとに置いてあるティッシュを一枚取った。強くティッシュを目に押し当てて、涙を止めようとした。しかし、涙はやはり止まらなかった。

そうだ、出せるだけ、涙を流してしまおう。そうすれば、ゆうちゃんとの思いでも流れ出てしまうかもしれない。ベッドの下の引き出しからフェイスタオルを取り出した。涙に濡れたティッシュを捨てて、フェイスタオルを目に軽く押し当てた。

思い返してみると、私が中学1年生のときのクリスマスプレゼントに、ゆうちゃんからもらったタオルだった。私の大好きなピンクの無地のフェイスタオルだ。しばらくは、このタオルをよく使っていた。夏場は、かばんに入れて持ち歩いていた。高校に入学すると、今度は入学祝に小さなバッグをプレゼントされた。そのバッグには、ピンクのフェイスタオルは入らず、大事に取っておこうと、ベッドの下の引き出しにしまっていたのだ。

墓穴を掘ってしまった。考えてみると、この部屋には、ゆうちゃんからのプレゼントがたくさんある。私は、ゆうちゃんからもらったものは、全て大事に取っておいてある。一箇所にまとめてではなく、ベッドの下の引き出しに入れたり、机の引き出しに入れたり、かばんの中にあったり……。帰そうと思っていた指輪の存在に気がついた。勢いあまって、指輪のことを忘れて、帰ってきてしまったんだ。

流石に、あの指輪は返さなくては。出来るだけ、他のものも返したい。そばにあると、絶対にゆうちゃんのことを思い出してしまうから。すでに、フェイスタオルを見て思い返してしまっている。

紙袋にでも入れて、ゆうちゃんからのプレゼントを返そうと思っ
ていると、かばんの中から携帯の着信音が聞こえてきた。涙を拭き
ながら、携帯の画面を見ると、ゆうちゃんからだった。

ゆっくり、話がしたいんだ。落ち着いてからで良いから、連絡を
待ってるよ。

ゆうちゃんらしい、優しい口調だった。

時計を見ると、すでに3時を回っていた。何時にゆうちゃんの家
を飛び出したのかはわからないけれど、ずいぶん時間が経っている
ことだけはわかる。ゆうちゃんも、両親も思い悩んでいたのだろう。
その光景を想像したら、ずっと隠し続けてきたことに強い罪悪感を
覚えた。

もう会えないと思っていたのに、もう一度会おうと言われてしま
った。ほんの一瞬で終わらせられるような、簡単なことではないん
だ。私は、終わらせることが出来たとしても、ゆうちゃんは、決し
て納得が出来ないのだろう。一度、自分の腕に手繰り寄せた獲物を、
いとも簡単に逃したままではいられないんだ。しかも、その獲物は、
ずいぶんと長い時間をかけて、ようやく手に入れたものなのだ。思
い入れだって、きっと、あるに違いない。

でも、私は逃げたくて仕方がない。このまま、世界の果てまで行
って、二度とゆうちゃんの顔を見ない方が、ずっと楽だと思っ
つ。

それって、やっぱり、”逃げ”なんだな。見てもらいたい自分だ
けを、ゆうちゃんに見せようとはかりしている。せつかく、体当た
りしたと言うのに、逃げるのを止めたと言うのに。また、私は逃げ

ようとしているんだ。

流石に、これからと言うのは、辛すぎる。私は、「もう少し、待って欲しい」とだけ打って、メールを送信した。

優しさに包まれて

あの日以来、私とゆうちゃんは、一緒に駅に行かなくなった。もちろん、それだけではなく、会うこと自体がなくなってしまったのだ。ゆうちゃんの部屋のカーテンは、いつも閉められている。私に気を使っているのは、すぐにわかった。

止めて欲しいんだよね、そうやって優しくするの。これ以上、好きになりたくないのに。嫌いになれたら、どんなに楽か。

私も、ゆうちゃんの家がよく見える窓のカーテンを閉めた。もうこのカーテンは、開けないと心に決めながら、シャツときれいな音がするくらい勢いよく閉めた。

ゆうちゃんのない朝に慣れてきたころ、会社の最寄り駅の改札横にあるラックから、フリーペーパーを一冊手に取った。賃貸情報誌だ。もう引越してしまおうかと思っている。私が、実家にい続ければ、ゆうちゃんだってあの部屋のカーテンを開けることが出来ないままだ。私だけなら我慢できるけれど。

ラックの前で、急いで賃貸情報誌をかばんにしまうと、定期を取り出し、改札を出た。

どこか、安くていい部屋がないかと思い、会社に着くと、パソコンもつけずに、賃貸情報誌を広げていた。「おはよう」と生返事をしながら、賃貸情報誌を真剣に見ていた。始業時間までは、ここに集中するぞと決めたのだ。

「あら、引越してもするの？」

机の上に広げている賃貸情報誌を覗き込みながら、社長が話し掛けてきた。お決まりのベビードールに身をまとっている。

「ええ、一人暮らしでもしてみようかなって思ってた」

「ふうん、そうなの」

社長は、すぐに自分の席には行かなかった。不服そうな表情で、腕組みをしている。

「ちょっと、会議室に来てくれる？」

「あ、はい。今すぐにですか？」

「そうよ。今すぐに」

社長はそう言うと、自分の席に行った。賃貸情報誌をかばんにしまい、筆記用具を持って、私はすぐに会議室へ行った。誰もいない会議室は、ひんやりしていた。観葉植物すらない殺風景な会議室だ。窓際のパイプ椅子に座り、社長が来るのを静かに待った。

トントントン……

静かな会議室に、音がした。気が付くと、私は貧乏ゆすりをしてきた。こんなくせ、あつたっけ？

貧乏ゆすりを止めると、すぐに社長が現れた。社長は、私の隣の隣の席に座った。そして、私にっこりと微笑んでくれた。

「ごめんなさいね。急に呼び出しちゃったりして」

「いいえ、いいんです」

社長は、微笑んだまま、軽く手を組んだ。

「さっき、引越そうと思ってるって、言ってたでしょ？」

「ええ、そうですけど……」

「よかつたら、家に来ない？ 空いてる部屋もあるし。ここからも近いのよ。ねえ、どうかしら？」

相変わらず微笑んだまま、社長はノリノリでそう言った。社長と一緒に暮らす？ 悪い話ではないけれど、気を使わせてしまっているのが、体中からにじみ出ている、申し訳なくて仕方がない。

「社長、私に気を使わなくていいですから」

「あなたこそ、私に気を使っただけじゃない？」

凶星だった。入社面接のときから思っていたけれど、社長の人物を見る目は、恐ろしいほど鋭い。私の心の中を全て、見通しているような気がした。最初に会ったときもそうだし、今もそうだ。私が考えていたことを、すらすらと口に出している。社長の言葉に、私は何も答えられずにいた。

「まあ、いいわ。私に気を使ってくれるのは嬉しいけれど、今は、他人に気を使うどころじゃないんじゃないの？」

もしかやと思った。ゆうちゃんのことを、悟っている。私の決心を。

私の足が、自然と動き出そうとしている。また、貧乏ゆすりをはじめる気だ。目の前には社長がいるんだからと思い、すぐに自分の足を止めた。

「いいのよ、何も言わなくて。辛いときには、人に頼ってもいいのよ。私に出来ることがあつたら、なんでもするから、言つて頂戴ね」

単なる一社員に過ぎない私に、やりすぎるほどの優しさを与えてくれている。それに甘えてもいいのか、私は無言で考えた。

「私に気を使わなくていいから、ね」

社長は、ずっと私に微笑んでくれている。ここまで思ってくれている社長の気持ち、踏みじめるのも申し訳ないと思つてきた。

「ありがとうございます。じゃ、お言葉に甘えて、社長の家に引越しをさせてもらいたいですけど……」

「いいわよ。引越しは、いつ頃がいいかしらね」

ルンルン気分と言つた感じで、社長は早速持つてきた手帳を開いた。気が早いわね、と思ひながら、いつがいいか、二人で考えることにした。私は、いつでもよかった。出来れば、早い方がいいくらいに思つていた。社長と話をしているうちに、一つの作戦を思いつき、引越しの日程はようやく決まつた。

久しぶり

「ただいまー」

ぐったりとした体を引きずって、家に滑り込むようにして入ると、リビングに懐かしい顔があった。かばんを肩にかけたまま、何の連絡もなしに来た客人を、きよとんとした顔で見っていた。

「薫！ どうしたのよ、急に来て」

「良いじゃないか。そんな硬いこと言わなくてもさ。久しぶりの実家なんだし」

薫が、リビングの椅子に腕を広げて座っている。久しぶりの実家とは言え、ちよっとくつろぎすぎていると思ってしまう。

一度、自分の部屋に行き、着替えを済ませると、すぐにリビングに下りた。私は、薫の正面に座った。薫の隣には、座りたくても座れない。薫は一人で、二つの椅子を占領してしまっている。隣の椅子に腕をまわしたままだったのだ。

「今日、会社は？」

「今日は、休んだんだよ。家内の定期検診に付き添っててさ。今、妊娠3ヶ月なんだよ」

妊娠という言葉を聞いて、私の心はえぐられた。私が強く望んでも出来ないこと。薫の奥さんは、女性なのだから妊娠したっておかしくはないんだ。いつかは、聞かなければならなかった台詞。わか

っていたのに、全く心の準備をしていなかった無防備な私に、薫の言葉は強烈なボディブローのように、私の心を引き裂いた。

おめでたいことなのに、素直に喜べない自分が、憎い。すぐに、おめでとうと言うのが姉の務めのはず。私は引きつった笑顔で「おめでとう」と、小さく言った。

薫は、照れくさそうに「ありがと」と言った。

何て姉だろう。正確には、兄ではあるが。どうして、弟の薫の奥さんに嫉妬するのだろう。最愛の人の子供を産めない体であることは、ずいぶん前から知っていたのに。

「女の子？ 男の子？」

「え、まだ、わからないよ。3ヶ月だもの」

「ああ、そうだったわね」

突拍子もないことを口走っていた。早く、落ち着かなくでは。久しぶりに薫に会ったというのに、姉らしい態度を取れないでいる。

「姉ちゃん、眠いんだろ？ 眠くなると、いつも訳のわからないことを言うからな」

私は露骨にムツとしてしまった。正面の薫は、「いつけね！」とでもいいたげな顔をしている。まずい事をした後は、必ず薫はこう言う顔をする。全く変わってはいないみたいだ。子供のあどけなさをいつまでも持ち続けている。

「奥さんは、家で一人でいるの？」

「ああ、そうだよ。つわりがひどくてさ。今、家で横になってると思っよ」

「奥さんを一人にしておいて、大丈夫なの？」

「大丈夫！ 母さんの料理をタッパーにつめたら、すぐに帰るから」

薫らしい。奥さんが、つわりがひどいからお母さんに夕食を余分に作ってもらおうって訳らしい。ちゃっかりしているとこも、小さい頃から全然変わっていないようだ。

「今まで、一度も、奥さんのつわりがひどいからって来なかったじゃないの」

「家内の妊娠は、安定期に入ってから言いたかったんだよ。でも、つわりがかなりひどいみたいでさ。だったら、先に言っておいて、いろいろと協力してもらいたくなって思ったんだよ」

ちゃっかりしているだけではなかったようだ。何時の間にか、弟は大人になっていたみたいだ。最愛の妻を支えている。自分だけではどうにもならなければ、周りに助けを求めても、最愛の妻を守ろうとしている。自分の弟とは言え、その姿勢にはちょっと心を打たれた。

「やるじゃないの」

「今ごろ気付いたのか？」

腕が疲れたのか、薫は椅子においていた手を離し、頬杖をついた。私は、チラッと窓の外に見える、我が家の隣の駐車場を見た。半分は月極めで、もう半分はコインパーキングになっている。コインパーキングの一番壁際には、薫のグレーのセダンが置いてあった。タクシーを受け取ったら、あの車に乗って帰るのだろう。薫の家は、ここからさほど遠くはない。車であれば、20分もあればついてしまう。

「なあ、兄ちゃん」

突然、薫が私を呼んだ。小さいころから、「お姉ちゃん」と呼ぶように言っているのだが、たまにこうして「兄ちゃん」と呼ぶことがある。何回も同じ呼び方をされているが、何度聞いても、私は必ず頭に血を上らせてしまう。

光のごとく素早く立ち上がり、椅子がひっくり返りそうになった。そんなことはお構いなしに、私はテーブルを平手で両手で叩くと、

「ちよつと！ 何度言ったらわかるのよ！ お姉ちゃんでしょう！」

私の行動を想像していたのか、目の前で薫は、ケラケラと笑っている。おなかを抱えて、顔を真っ赤にして。我が弟とは言え、そこまで笑っているかと思うと、頭から湯気が出そうになるほど体中のちが煮えたぎる。

「薫、笑いすぎよ！」

大声で注意をしても、薫の笑いは止まらない。と、次の瞬間、ドーン！ と、大きな音を立てて、椅子とともに、薫が後ろにひっくり返った。頭を打ったらしく、すぐに椅子から離れて起き上がると、

薫は頭をさすっていた。

「天罰よ」

薫は情けない顔をしていた。「いつてー」と言いながら、椅子を起こして、よろよろと老人のように力なく椅子に座った。その姿といたら、さっきの威勢のいい薫とは違い、天罰を受けてすっかり力を無くしたという感じた。

とてもおかしかった。爆笑の顔が、一瞬にして消えていった。今度は、私がおなかを抱えて笑っている。間の抜けた顔の薫を見るのは珍しい。久しぶりを見る、間抜けな薫の顔に、笑いが体の心からどンドン沸き起こってくる。

「兄ちゃん、笑いすぎだぞ」

ピクツと私の耳が動いた。抵抗をするかのように、薫が、またも私を「男」扱いしてきた。

「冗談は、好い加減にやめて頂戴。もうすぐ、親になるんでしよう。それに、さっき天罰を食らったのに、まだ懲りてないわけ？」

「悪かったよ。それにしたって、笑いすぎだ……。それよりも、ゆうちゃんとはどうなってるんだよ。俺、ずっと、気になってたんだ」

最近、久しく会っていない人の名前が出てきた。かなり抽象的な質問で、どう応えていいのかわからない。私は、まずは椅子に腰掛け、落ち着いて言葉を選んだ。

「言ったわよ。私が、男だって言うこと」

「で、何だって?」

薫が、身を乗り出してきた。私の目を見ようとすると薫の目をそらした。私が、一方的に告白しただけで、ゆうちゃん表情は全く見なかった。それだけじゃいけなかったんだ。相手の反応も見ておかなくてはならなかったはず。なのに、私は怖くなって、飛び出してしまった。逃げてしまったんだ。

「何も」

「.....」

会話は、途切れてしまった。薫も、どうしたらいいのかわからないらしい。もうこれ以上、私としては、ゆうちゃんの話はしたくない気分だ。

「なあ、それって、ゆうちゃんをあきらめるって事なのか?」

意外な言葉が出てきた。私は、今まで一度も薫にゆうちゃんへの想いを言ったことはなかったのだ。自分だけの中に閉じ込めてきたはずの想いを、なぜ、薫が知っているのだろうか?

「あきらめるって.....」

「姉ちゃん、ゆうちゃんのこと、ずっと好きだった。だからさ、くつつくのかなって思ってたんだよ。姉ちゃんが男でも、ゆうちゃんだったならそんなことは気にしないと思ってさ」

自分がそんなにわかりやすい行動をしていたらどうかと思った。薫の言うとおり、私は、ずっとゆうちゃんが好きだった。私の初恋の人だ。今でも、その気持ちは変わらない。他の人に言い寄られ、ゆうちゃんをあきらめるために他の男性と付き合ったこともあったけれど、どんなときも私の心の中にはゆうちゃんがいられた。

「私が、気にするのよ」

「何を？」

「私は、ゆうちゃんを幸せになんて出来ないもの。ゆうちゃんの大好きな子供を産んであげられないのよ。彼の夢を叶えさせることが出来ないんだから、一緒にいないほうがいいのよ」

薫は、腕を組み、不服そうな表情を露骨に見せた。

「子供か。子供だったら、養子でも取れば良いじゃないか。今は、医療も発達して、第三者の女性から卵子を提供してもらって、体外受精して代理母にゆうちゃんの子供を産んでもらう事だってできるだろう？」

「確かに、それはやろうと思えばできるわ。でもね、その方法はとても難しいのよ。苦勞をして、やっとのことで子供が授かれば良いけれど、だめかもしれないじゃない。莫大なお金だつてかかるわ。私はね、ゆうちゃんには、そんな苦勞をして欲しくないのよ」

涙をこらえて、そう言った。体の奥から、マグマのように熱いものがふつふつとこみ上げてくる。それは、休むことを知らず、どんなに私が止めようとしても止まってはくれない。涙を飲み続けて入れ受けれど、誰かに背中を押されたら、大粒の涙が、ボロツとあふ

れてしまっだろう。

「それは、本当に苦勞なのかな。好きな人のそばにいることのほうが、ずっと大切な事だってゆうちゃんは言うはずだ」

「ゆうちゃんのことを、わかった風に言わないで！」

「じゃあ、姉ちゃんはゆうちゃんをあきらめられるって言うのか？」

「もちろんよ」

「嘘つくなよ」

本当は、すぐに嘘じゃないと言いたかった。だけど、私の頬を流れる涙が邪魔をした。

「嘘が下手だな。無理しちゃって。姉ちゃんが、そんなんじゃないよ。ゆうちゃんだってあきらめられないだろう？　なあ、あきらめるなよ。ずっと追い続けてきた人じゃないか。愛してるんだったら、性別なんてどうだって良いじゃないか。回りのことなんて気にせず、飛び込めば良いじゃないか」

ずっと押さえつけてきた、私の願望を薫は、いとも簡単に言ってしまった。我慢していたのに。ゆうちゃんの幸せのために、ぐっところえていたのに。私が心の中で押し殺していたものを、薫はすべてぶちまけた。

何も反論することが出来ず、薫の目をじっと見つめ、涙を流し続けた。薫も、私の目を鋭く見つめている。

膝に涙の粒が落ちると、テーブルの上に置いてあるティッシュを取り、涙を拭いた。絶対に、ゆうちゃんには幸せになってもらいたい。だからこそ、私は身を引くんだと自分に言い聞かせた。

「私のことよりも、奥さんの心配をしてあげて。そろそろお母さんが、タッパーにおかずを詰め込み終わるころよ」

それ以上、言葉を交わすことはなかった。流石の薫も、何も言うことはなかった。無言の時間が通り過ぎた後、母が紙袋におかずを入れたタッパーを入れて、薫に手渡した。すると、薫は「サンキュ」とお礼を言って、帰ってしまった。

いめんね、ゆうちゃん

毎年、バレンタインデーはゆうちゃんに手作りチョコをプレゼントしていた。が、今年は、違う。今年も、バレンタインデーに会う約束はしたけれど、もうチョコはあげない。

先週、メールでバレンタインデーにあの公園で会おうと伝えた。ゆうちゃんは、5分もしないうちに返事をしてくれた。OKと。

一体、どんなことを言われるのだろう。ただ、どんなことを言われたとしても、私は変わらない。決して、ゆうちゃんと結ばれてはいけないんだと、わかっていたから。私の幸せは、ゆうちゃんの幸せ。そのゆうちゃんが、幸せになるためには、私は必要ないんだということも、わかっていた。

今年のバレンタインデーは、いつもとは違う。いつもはただの通過点だったけど、今年はピリオドだ。

夜になり、街灯が寂しく道路を照らすころ、会社帰りに私は思い出の公園へと足を運んだ。寒空のした、手袋をはめたのに手は冷たいままだ。両手でこすり合わせながら、ひたすら歩いた。もうすぐ、ゆうちゃんに会える。もうすぐ、ゆうちゃんと別れる。

公園に着くと、すでにゆうちゃんはベンチに座って待っていた。ゆうちゃんは私に気がつくと、すぐに立ち上がり、小走りに私に駆け寄った。両手を広げ、私を抱きしめようとするゆうちゃんを、私は手で制した。するとゆうちゃんは、一瞬だけ寂しそうな顔をしたが、すぐに、口角をあげて笑顔を作った。

「会いたかったよ。メールをもらったとき、すごく嬉しかったんだよ」

「ごめんなさい、なかなか連絡しなくて」

「良いんだよ。それより、寒くない？」

ゆうちゃんの優しさが、私の体に針をさしているかのようだった。こんなに優しい人を、私はこれから裏切ってしまう。でも、それがゆうちゃんにとっての幸せなんだ。ゆうちゃんを横目で、見ながら、クリスマスと同じようにベンチに座った。

「ねえ、ゆうちゃん。今まで、ずっと私が男だってことを隠してて、ごめんね。本当は、もっと早く言いたかったんだけど」

「良いって、気にしないで良いよ。もう過ぎたことじゃないか。それに、マーちゃんはちゃんと僕に、本当のことを言ってくれたんだ。何も、謝ることなんてないんだよ」

すっかり、ゆうちゃんは顔中くちやくちやにして、笑顔になっていた。細くなったその瞳で、私を抱きしめる。ゆうちゃんには優しい瞳で、私を見て欲しくはない。でも、それに負けないようにと、私は目をそらさなかった。

「優しいのね。今日は、大事な話をするために、ゆうちゃんを呼んだんだよ」

「僕もそうだよ。大事な話をするために、ここに来たんだ。……
・僕は、マーちゃんが男でも女でも、どっちだって構わないよ。
男なんだって聞いても、僕の気持ちは全く変わらなかったんだ。今

でも、変わらず、マーちゃんのことを愛しているよ」

あらかじめ、想像はしていたけれど、実際にゆうちゃんの口から気持ちが変わってないと聞くと、心が揺らいでしまいそうになった。固く誓ったはずなのに、ゆうちゃんの一言で、別れる事を止めてしまおうかと思った。

「ゆうちゃん……」

「このまま、ずっと僕の側にいてくれるよね？」

「……ごめん。それは、出来ないよ」

「どうして？」

相変わらず、ゆうちゃんは怒りもせず、驚きもせず、ただただ、優しい目を私に向けている。次の言葉を言うのに、少しだけ躊躇しながらも、自分の甘えたい心に打ち勝つように口を開いた。

「ゆうちゃんは、子供が大好きでしょう？」

「ああ、そうだよ。でもね、別に、自分の子供がどうしても欲しいわけじゃない。それよりも、マーちゃんに僕の側にいて欲しいんだ」

「だめ、出来ないよ。ゆうちゃんには、自分の子供を作って欲しいんだもの。自分の子供と楽しそうに遊ぶゆうちゃんになって欲しいんだよ」

とうとう、ゆうちゃんの目が変わった。穏やかな優しい目ではなく、鋭く私を威嚇する目だ。冷たい風が、私たちの頬をくすぐって

は去っていく。そして、ゆうちゃんが私の肩をつかんだ。

「子供がいなくても、僕は大丈夫だよ。僕の一番の幸せはね、マーちゃんと一緒にいることなんだよ。マーちゃんが、この街に引越してきたとき、何てかわい子がいるんだろうって思ったんだ。あのときから、僕の心の中には、マーちゃんしかいないんだよ」

「ありがとう。すごく嬉しいよ。本当に、ゆうちゃん、ごめんね。私には、無理だよ。もしも、ゆうちゃんの側にずーっといたとしたら、ゆうちゃんの子供を奪ってしまったら、私は、私をうらんでしまふと思うの。ゆうちゃんのを奪ってしまった自分を、この世で一番憎むはず。そんな現実、私には、耐えられないよ」

ゆうちゃんは、黙ってしまった。私の肩から手を離すと、だらりとそのまま腕をたらししてしまった。まるで、全身の力が抜けたよう。

「自分を恨む必要なんてないよ。僕が、決めたことなんだから」

風に乗って、私の耳にゆうちゃんの声が届いた。先ほどよりも、力のない声。半分、あきらめている感じがした。

「違うわ。ゆうちゃんが、一人で決めたことにはならない。好きだけじゃ、一緒にいられないんだよ」

「でも、好きじゃなきゃ、一緒にはいられないだろう？　一番好きな人と一緒にいるのが、最高の幸せだろう？」

私は、頷きたかった。だけど、私は黙ってゆうちゃんを見ていた。恨めしそうな目で、私を見つめている。そんなゆうちゃんを抱きしめたい気持ちに刈られた。

寒いでしょ？ 私が、温めてあげるって、言いたくなかった。ゆうちゃんが、私を欲している目をしているのを見ると、いてもたってもいられなくなる。今すぐに、抱きしめたいけれど、ゆうちゃんの幸せを壊してしまいそうな気がして、私には出来なかった。

「じゃあ、ゆうちゃんのご両親は何て言っているの？」

「両親は、かなり悩んでいるようだったよ。今でも悩んでいるだろう。僕には、ただ驚いたとしか言わなかったんだ」

本当は、反対しているのだろう。例え、ゆうちゃんの話が本当だとしても、心の中では反対していると思う。自分たちの孫が欲しいと思っっているのだろう。それを願うのは、普通のことであり、当然のことだと思う。私には、それが出来ないのだから、複雑だけど反対しているだろう。

「お嫁さんに来て欲しいようなことは、前から言ってたんだよ、マーちゃんのことを」

もっと早く言っておけばよかった。傷口を広げてしまったんだ。ゆうちゃんだけでなく、ゆうちゃんのご両親にまで。後悔しても、もう遅い。そうわかっていても、言えなかった自分を恨んでしまう。

「きっと、ゆうちゃんにはもっと素敵な人が、現れると思うよ」

「僕には、マーちゃんが一番だよ」

もうこれ以上、私に甘い台詞を言って欲しくはないのに、容赦なくゆうちゃんは、私に甘い言葉を投げかける。心も体もぐらつきそ

うになつてしまふ。

決めたんだから。強く自分に言い聞かせて、流れそうな熱いものを飲み込んだ。

「何を言つても、私の心は変わらないわ。もう決めたのよ。別れましょう。ずっとゆうちゃんの側にいたけれど、これからは別々の道を歩んでいきましょう」

「もう一度、考え直してはくれないのか？」

潤んだ声だった。ゆうちゃんの頬を涙が伝った。初めてだ、私がゆうちゃんを泣かせたのは。一度だって、ゆうちゃんの涙を見たことはなかった。私は何度も泣き顔をゆうちゃんに見せていたけど。

ぼたぼたと、頬を伝った涙の雫が、ゆうちゃんの膝に落ちていった。半開きの唇は震え、目を真っ赤にしている。冬の大三角形の下、ゆうちゃんは私から目をそらそうとはしなかった。

「言つたでしょう？ ゆうちゃんと一緒にいたら、ゆうちゃんの夢を奪ってしまうたら、私は自分を恨んでしまふ。自分を一番憎く思つてしまふの。ゆうちゃんが夢をかなえてくれることが、私の夢なのよ。ねえ、お願い」

鼻をすすった。私の目からも、大粒の涙がこぼれた。ずっと我慢していたけれど、もう無理だった。もうすぐ、永遠の別れが来る。今日、ゆうちゃんと別れたら、二度と会うことはないんだ。

「どうしても、マーちゃんの気持ちは変わらないんだな」

コクンと大きく頷いた。

「そうか……。わかったよ。マーちゃんにそこまで言われ
たら、僕ももう何も言えないな」

涙に濡れた唇をぎゅっと吊り上げて、無理やりゆうちゃんは笑顔
を作った。そして、私の後頭部に手をまわし、私の唇を奪おうとし
た。すかさず、私はゆうちゃんの唇に自分の手を押し当てた。

「そんなことをしたら、別れが悲しくなるだけよ」

「もう十分、悲しいよ。最後に、もう一度、マーちゃんのぬくもり
が欲しいだけだ」

「私には、ゆうちゃんのぬくもりなんて必要ないわ。ここでキスを
したら、さよならが一層辛くなるだけ」

ゆつくりと私の後頭部から手を離し、体も離れた。観念したよう
で、すっかりゆうちゃんは、気落ちしてしまっている。

私の方が、先に帰った。一緒に帰ると、別れ際に、またつらくな
ってしまいそうだから。ゆうちゃんは、一人残った公園で、泣いて
しまうのかしら？ だとしたら、その姿は見ないほうが良いだろう。

帰り道、携帯を取り出すと、まどかに電話をした。ゆうちゃんと
別れたことを告げると、残念そうな声を出した。しかし、

「二人で決めただよな？ 真澄が、一人で決めたんじゃないよな
？」

「うん、最終的には二人で納得して、別れたのよ」

「そっか。だったら、よかった」

最後の最後まで、まどかは心配してくれているようだ。まどかには、昔からゆうちゃんのこと、いろいろと相談していた。だから、人一倍、心配してくれていたと思う。ごめんなさいって言いたかったけれど、くすぐったくて言わなかった。

もう二度と、ゆうちゃんと会うことはないだろう。涙があふれ出そうになると、電話を終えた。

小さいころ、ゆうちゃんと約束したことが果たせなくなってしまったんだ。星が大好きなゆうちゃんは、大きくなったらいろいろなところに、星を見に行こうと言っていた。南半球でしか見られない星もたくさんあるんだと言って、絶対に一緒に見に行こうと言ってくれた。

二十歳を過ぎても、なかなか二人で海外に行くことはなかった。そのうちと言って、なかなか実行には移さなかった。結局、一度も見に行くことが出来ずに、永遠の別れを迎えてしまったんだ。

私のことを小さいときから、ずっと見守り続けてくれて、ありがとう。本当は、そう言いたかったのに、言うことが出来なかった。今すぐに、公園に行けば、ゆうちゃんに会って直接伝えることも出来る。しかし、今、会いに行ってしまうえば、別れ話が流れてしまう可能性だってある。それでは、ゆうちゃんの夢を奪ってしまうことになるではないか。

公園には戻らず、そのまま家に帰った。

家に着き、自分の部屋で一人ぼっちになっても、涙は流れてこなかった。まだ、ゆうちゃんと別れたことを認識していないかのようだ。つい数分前まで、一緒にいたゆうちゃんと、もう会うことはないんだとわかっているつもりなのに。

それとも、涙は出尽くしてしまったのかしら。別れを告げる前にこの部屋でわんわん泣いていた。ゆうちゃんの思い出の品を見るたびに、涙がとめどなく零れ落ちていた。だから、もうこれ以上泣く分の涙は、なくなってしまうたのかもしれない。

さっぱりとした気持ちで、私は荷造りを開始した。

出会いと別れ

ゆうちゃんと別れ、家を出ることになった。これで、両親二人だけの家となってしまうんだ。少し寂しそうな両親と別れ、私は社長の家へと引越した。

車で、社長が迎えにきてくれ、昨日の夜、荷造りしておいた荷物を、手分けして運んだ。両親とは、もう二度と会えないわけじゃないので、湿っぽい感じの別れではなかった。ただ、私がこの家に来ることが、あるかどうか。実家に帰れば、ゆうちゃんと会ってしまいかもしれない。しばらくは、ゆうちゃんと会わないようにしたいと思っっている。

顔を見てしまえば、気持ち揺らいでしまう可能性は、十分にあり、自分の弱い心を出さないためにも、もう会いたくはない。

社長の家は、高級住宅街の中にあつた。高そうなマンションの最上階が、社長の部屋だ。もちろん、入り口にはオートロックがあり、エレベーターもついている。全体的に、落ち着いた茶色に統一されており、ドアノブなど細かいところに金色があしらわれている。

社長の部屋に着き、大理石の玄関を抜けると、だだっ広いリビングに目を奪われた。窓からは太陽の光が、注ぎ込まれ、部屋が真っ白に見える。白とアイボリー。似たもの同士の色ではあるが、上手く混ぜ合わせてあるので、とても落ち着いた感じに見える。統一された、清潔感のある部屋だった。

奥の部屋に案内されると、「ここが、あなたの部屋よ」と言われた。その部屋は、すでに掃除がされたようで、塵一つ落ちていない

し、荷物が置けるようにクローゼットも空になっていた。ベッドだつてある。

ここまでよくしてもらつて、恐縮していると、部屋を案内すると言われてしまった。荷物を置いて、社長に部屋を全て案内してもらつた。トイレとお風呂はもちろん別になっており、トイレにはウォシュレットが付いていた。

台所は、少し広く、導線にかなり気を使つてあるらしい。大きな冷蔵庫が台所を支配するかのようになり、置いてあり、電子レンジやオーブントースターなどは、棚に整頓されてある。

全ての部屋を案内してもらつと、隣の人に挨拶をしようと言われってしまった。言われてみれば、それが一番大切なことだと思つたが、全く心の準備が出来ていない。隣には、どんな人が住んでいるのかと聞いてみると、フリーのWebデザイナーで、私たちとは全く逆の人が住んでいると言われた。私たちとは全く逆の人とは、見た目は男性だけど、中身は女性だということだ。

何も手土産も持っていないと言つと、社長と隣人はとても仲がよく、今度一緒に呑みに行けばそれでいいと言われてしまった。少し、不安にはなつたが、社長に着いていくことにした。

隣人に挨拶に行くと、短髪で鋭い目をした男性が出てきた。この人が、元女性？ 一目見ただけでは、男性にしか見えない。声を聞いて、少し女性のやさしさが見え隠れしているような気がした。

その男性の名は、小園壮太。本名は、壮子さんだとか。壮太さんは、私たちを家に上げてくれて、親切にお茶を出してくれた。私が引越してきた挨拶をしに来たのに、手土産も持たずに来た私を、

丁寧にもてなしてくれて。申し訳ないような気がして、肩身が狭く
なった。

「そんなに緊張しないで下さい」

壮太さんに促されるが、どうも申し訳なさでいっぱい、肩に力
が入ってしまう。出されたお茶に口をつけると、壮太さんの部屋を
見回した。作りこそ、社長の部屋と変わらないが、インテリアがま
るで違う。壮太さんの部屋は、原色が多く使われている。黒や赤や
青や緑と、はっきりとした色で構成されている。

テーブルは、黒。椅子もそうだ。カップは、黒地に大きな白い円
が描かれている。とてもおしゃれな部屋で、私は見とれてしまった。

「真澄さんも、こう言うインテリアが好きなのかな？」

「え、そうですね。自分の部屋はこう言うインテリアではないけれ
ど、憧れのインテリアだなんて思います」

「憧れかあ」

照れ笑いを浮かべると、壮太さんは自分のお茶をすすった。その
しぐさも女性のものとは、思えなかった。男性らしい豪快さがあり、
全く女性と思うことはなかった。

それから、壮太さんとはちよくちよく会った。社長抜きで、二
人で会うことも多かった。壮太さんは、聞き上手で、次第に私の心
にある寂しさに気付くようになっていった。何でも話を聞いてくれ、
全く怒ることなく、反論することのない壮太さんに、正直にゆうち
やんのことをだんだんと話すようになっていった。

壮太さんは、何も言わずに私の話を聞き続けた。いつだってそうだ。ゆうちゃんのことを忘れようとしているのに、なかなか忘れられない胸のうちを、いつしか壮太さんに言うようになっていた。私のお話が終わると、優しい言葉で私の心を温めてくれた。お陰で、ゆうちゃんがいなくても一人で立てるようになっていけたと思う。壮太さんが、話を聞いてくれると思うただけでも、気が楽になったのは確かだ。

引越して、一ヶ月が過ぎたころ、壮太さんの部屋で、二人でお酒を飲んでいると、またもゆうちゃんの話になった。

「彼の思い出が詰まったものは、全て実家においてきたけれど、私の体が、彼の全てを覚えていてるんです。普段は、なんとも思っていないんだけど、ふとしたときに、彼の記憶が自然とよみがえることがあるんです。彼の優しさが思い出されたとき、全身に痛みが走ります。苦しくて、悲しくて。まだ、彼のことを忘れていないんだって、実感させられるんですよ」

今日もまた、ゆうちゃんを思い出しては、苦しい胸のうちを話した。口にするのが辛いと感じる瞬間もあるのだが、それ以上に、壮太さんの優しさに触れたいと思うようになっていた。

壮太さんは、少しだけ顔を曇らせたが、すぐに温かい目で私を見てくれた。

「だったら、忘れなくて良いじゃないですか。忘れたくても忘れられなくて、苦しむくらいなら、ずっと覚えていればいい。その彼のことを忘れることが、必ずしもいいこととは言えないでしょう。思い出して、苦しいと感じるのならば、俺と共有しませんか？」

意外な言葉だった。全く想定していない単語が出てきた。壮太さんと、私の苦しみを共有するって、どう捕らえたら良いんだろう。

「壮太さんと……共有？」

「そうです。真澄さんが、一人で苦しんでいる姿を見るのは、俺にとっても辛いことです。だったら、一人で苦しまず、もう一歩踏み込んだ仲になってみてはどうかなんて思うんです」

「それって……」

「俺と、真剣に付き合ってもらいたいんです」

強い視線を私に送りながら、壮太さんはまっすぐに自分の思いをぶつけてきた。

「初めて会ったときから、素敵な人だなんて思っていたんです。話をしていくうちに、気持ちはどんどん大きくなっていった。真澄さんを守ってあげたいって、思っているんです」

「気持ちは嬉しいんですが、私は、まだ、彼のことを……」

そこまで私が言うと、続きを聞かずに壮太さんが言った。

「いいじゃないですか。彼は、真澄さんをここまで見守り続けてくれた人です。忘れなくたっていい。俺に、彼の話をし続けてくれたっていい。ただ、真澄さんの側にいたいだけです」

ひどいことのような気もしたけれど、壮太さんの気持ちを受け入

れてみようと思った。ここまで、私のことを親身に思ってくれているんだ。これ以上、人を悲しませたくはないし。

こうして、私は壮太さんと付き合うようになった。壮太さんに甘えて、ゆうちゃんの話を止めることはなかった。それでも、壮太さんは嫌な顔を見せることはなかった。

それから

壮太さんと付き合い、結婚し、私たちは双子の男の子を授かった。二人とも元気に育ってくれ、兄の和史は大学卒業後に高校の後輩と結婚。そして、弟の宏和も結婚すると言い出した。これで、私たちもまた、二人きりの生活になるのだなと、壮太さんと話すようになった。

「父さん、母さん、今度の土曜日に、樹理のお父さんと一緒に食事をしようって思ってるんだ。確か、大丈夫だって、言ってたよね？」

一人暮らしをしている宏和が、月曜日の会社帰りに家に寄ると、一緒に食卓を囲みながら、そう言った。今度の土曜日は、空けておいて欲しいと言われていたので、用事を入れることなく、宏和の発表を今か今かと待ち望んでいた。その日が、とうとうやってきたというわけだ。

「そういうことだったのか。だったら、早く言えばいいのに。全く小さいころから人を驚かすくせは、変わっていないようだな」

「良いじゃないか。悪いことじゃないんだから」

二人の会話を横で聞きつつ、私は笑顔を浮かべた。宏和は、きっとお父さんである壮太さんに似たらしい。

あなたと私の赤い糸

宏和に指定された会場に、それぞれで向かうということになった。私と壮太さんは、食事会に着ていくものを二人で選び、土曜日を待つことにした。樹理さんは、すでに宏和と挨拶をしにきてくれた。

樹理さんは、明朗快活で、幼さを残す宏和をしつめるにはもつてこの女性であると思った。壮太さんも同じことを言っていた。

土曜日は、すぐに訪れた。壮太さんに手を引かれて、待ち合わせの会場へと足を運んだ。会場は、フレンチレストランだった。樹理さんのお気に入りの店だという。すでに、尻にひかれてる気がした。オープンテラスもあるが、予約を入れておいた場所は、店の奥にある個室だった。明るい太陽の日差しをたっぷり受けた店内を通り、温かみのある照明で照らされた個室へと案内された。店内は、若い女性やカップルばかりで、年を取った私と壮太さんが場違いなような気がして、早く個室に入らなくてはと気が焦っていた。

個室のドアが開くと、宏和と樹理さんが隣同士に座り、樹理さんの隣には樹理さんのお父さんが……

ゆうちゃんだ。樹理さんの苗字は、植松とは聞いていた。しかし、それほど特異な名前とは思っておらず、ゆうちゃんの顔が浮かんできたものの、つながりがあるとは全く思っていなかった。

どうして、世界はこんなにも狭いのだろう。年老いてから、私とゆうちゃんを引き合わせるとは。

ドアの前で、身動きできず、ゆうちゃんの顔をじつと見ていると、壮太さんがそんな私に気がつき、手を差し伸べようとした。ゆうちゃんもこちらをじつと見ていたが、お互いに目をそらすと、私は壮太さんの手を握ることなく、指定された席に座った。

宏和と樹理さんも怪訝な顔をしている。壮太さんも、心配しているに違いない。これは、言ってしまった方がいいのだろうか。正直に、私の忘れられない初恋の人が、ゆうちゃんだということを壮太

さんに言ってしまった方がいいのだろうか。

顔をあげずにいると、樹理さんの話し声が聞こえてきた。

「ねえ、お父さん。宏君のお母さんと知り合いなの？」

「え、ああ……………」

明らかに動揺しているゆうちゃんの声が聞こえてきた。久しぶりに聞く、ゆうちゃんの声。顔は、しわが増え、目じりも下がってしまい、髪も白髪が目立ってはいるものの、声だけは全く変わっていない。優しいゆうちゃんの声だ。

声だけは、忘れていたはずなのに、ちゃんと覚えていたんだ。顔は、実家から持ってきたアルバムを見たりしていたので、忘れることはなかったけれど。声なんて、何十年も聞いていない。それなのに、懐かしいと感じてしまう。

「もしかして……………、お父さんの探してた人なんじゃない？」

樹理さんの話し声が聞こえてきた。ゆうちゃんの探していた人って、どういうことだろう。まさか、ゆうちゃんは私のことを探していたというのだろうか。思わず、私は顔をあげて、樹理さんたちのほうを見た。

「真澄！」

すると、壮太さんが、私の肩をぽんと叩いた。すぐに、そちらを向くと目を真ん丸くして私をギョツとした顔で見ている。

「まさか、この人が初恋の人じゃ。アルバムに写っていた人と、よく似ているじゃないか。真澄、そうなのか？」

ゆうちゃんの写ったアルバムは、壮太さんと一緒に年に何度か見ている。苦しみを共有しようという言葉どおり、壮太さんは私の大事なゆうちゃんとの思い出を共有してくれた。壮太さんが、気づいてしまったんだ。目の前にいる人が、私の初恋の人だと。

私は、黙って首を縦に振った。

「よかったな。やっと、会えたんだな」

壮太さんは、怒るでもなく、微笑みを浮かべると私の手を握り締め、そう言った。

「お父さん！ よかったじゃない！ ずっと会いたがっていた人なんじゃない？ 本当に、よかったね、おめでとう！」

宏和は、黙って手を叩いた。パンパンときれいな音が個室中に響き渡ると、宏和と樹理さんと壮太さんの三人が、拍手してくれた。

みんなで、私とゆうちゃんの再会を祝福してくれている。だけど、素直に喜ぶことは出来なかった。今でも、私の心の中に、ゆうちゃんはいらぬ。ずっと、私はゆうちゃんと一緒に続けた。

しかし、実際は私と一緒にいたのはゆうちゃんではなく、壮太さんだ。私を一番に想い、支え続けてくれた人だ。その人の前で、ゆうちゃんと再会しても、心が痛むだけだ。

もう二度と会わないと思っていたのに、永遠に会えない人だと思

っていたのに。まさか、私たちの息子とゆうちゃんたちの娘が結婚するとは。これもまた、運命なのだろうか。

ゆうちゃんの奥さんは、数年前にガンで他界している。子供は、樹理さんの上に二人男の子がいるそうで、二人ともすでに結婚しているという。

食事が運ばれても、話題は私とゆうちゃんだった。壮太さんたち三人は、嬉しそうに私たちの再会を喜んでくれている。

樹理さんの話では、樹理さんの母親が亡くなる直前に、こんな遺言を残したそうだ。病床で、全身に転移するガンの痛みに耐えながら、樹理さんの手をぎゅっと握り締め、

「樹理、私が死んだら、お父さんの初恋の人を探してあげて。お父さん、初恋の人のことなんて一言も言わなかったけれど、お母さんは知っているの。押入れの片隅にある初恋の思い出が、今でも心の中で鮮やかに咲いていることを。もう、お母さんはお父さんの側にはいてあげられない。だからね、初恋の人を見つけてあげて欲しいのよ」

そう言うと、また、痛みに顔をゆがめたそうだ。樹理さんは、どう探したらいいのかわからず、一人で悩んでいたそうだ。ゆうちゃんも、私のことを実際に探そうとはしていなかったもので、樹理さんは結婚して落ち着いてから探そうと思っていたという。

「これで、お母さんの願いが叶ったんだわ」

嬉しそうに、食事を頬張る樹理さんを、複雑な思いでしか見ることが出来なかった。

食事の途中で、私は席を立ち、トイレへと向かった。すると、そのすぐ後ろからゆうちゃんが追いかけてきた。トイレまでのにぎやかな店内とは打って変わって、寂しい廊下に立ち止まると、ゆうちゃんとの久しぶりの会話をすることになった。

「マーちゃん、久しぶり」

「お久しぶり。元気そうで、よかったわ」

あまりにも時間がたちすぎたせいか、どことなくぎこちない会話から始まった。長い時間をかけて固まった氷が溶けるのは、意外と早かった。

「僕は、マーちゃんの願いどおり、女性と結婚して子供も三人授かったよ。マーちゃんも結婚して、子供を授かっていたとはね」

「逆転夫婦だけど、ちゃんと子供は授かったわ。でも、本当によかった。ゆうちゃんが、幸せそうで。私と一緒にいたら、この幸せを手にすることは出来なかったんだもの。あの時、別れて正解だったのね」

「そうかもしれないね。でも、もし、あの時別れていなかったとしても、僕は幸せになれたと思う。どんな道を歩もうが、幸せになるために歩いていけば、その先には必ず幸せが待っていると思うんだ。僕たちは、別々の道を歩んだけれど、同じ道を歩んでいたとしても、別の幸せがあったと思うよ」

私は苦笑した。どの道を歩いても、ゆうちゃんは正解だったと思っ
ているのだからうけれど、私はこれでよかったと満足している。

「いい旦那さんをもらったようだね」

「ええ、とても優しい人よ」

話は、壮太さんへと移った。嫉妬するでもなく、ゆうちゃんは穏やかな顔をしていた。

「ゆうちゃんの奥さんに会えなくて、とても残念だわ」

ゆうちゃんの顔が、真剣な顔になった。触れてはいけないことだったみたいだ。数年前のこととは言え、自分と一緒に幸せな家庭を築いた妻のことを、忘れるはずはなく、今でも悲しみにくれているのだろう。

「ごめんなさい。無神経なことを言ってしまつて」

「いや、そんなことはないよ。……ただ……」

「ただ？」

「マーちゃんが結婚しているって知って、ちょっと残念に思つてね。もしも、今でも一人でいるのなら、一緒に暮らせないかなと思つていたんだ」

何十年も前に置いてきた気持ち、一瞬にしてよみがえってきた。ゆうちゃんの側にいたい。でも、そんなことが出来るはずはない。私には、壮太さんがいるのだから。

「ありがとう。その気持ち、とても嬉しいわ。私だつて……」

、ゆづちゃんのこと……」

それ以上は言うてはならないと思い、言葉を飲み込んだ。私は、禁句を言おうとした。踏み込んではいけない世界に、踏み込もうとするなんて。壮太さんを裏切るようなことをしようとした自分が、嫌だった。

見つめあう私たちの周りには、付き合っていたころの空気が漂っていた。甘い空気の中に、今、私たちはいる。

「今度、生まれ変わったら、私、女として生まれるわ」

「そうか。じゃあ、僕は男として生まれなくちゃならないな」

クスツとお互いに笑みを浮かべると、ようやくトイレへと向かった。

家に帰ると、壮太さんが大事な話があると言い出した。リビングテーブルに座ると、真剣な顔で、壮太さんが話し始めた。

「今でも、植松さんのことが、好きなんじゃないか？」

単刀直入に言われた。さっきも飲み込んでいた気持ち、壮太さんは簡単に口にしてしまった。それだけは、言うて欲しくはなかった。言葉にしてしまえば、本当にゆづちゃんへの気持ち、冷凍保存から解凍されてしまう。すでに、冷凍されていたものが溶けかけているようだ。

黙って、俯いていると、壮太さんは深いため息をついた。

「好きなんだな。実は、真澄と植松さんがトイレに立っているときに、私たちだけで話し合っただよ」

俯いていた私は、顔をあげて壮太さんの顔を見た。

「宏和ももう結婚する。子育てからも、完全に開放されることになるんだし、真澄、一番好きな人と一緒になったらどうだ？」

一番好きな人と言う言葉に、戸惑いを覚えた。ゆうちゃんと壮太さんへの想いの違いは、一体なんだろう。壮太さんといると安堵感に満たされ、ゆうちゃんといると心を締め付けられるような心地よい痛みを感じる。

「何言ってるのよ。壮太さんと、やっと二人きりの生活を再開させることが出来るのよ。それを楽しまなくちゃ」

「無理しなくていいんだ。真澄が、植松さんを見る目は、俺を見る目とは全く違っていた。あんな目をした真澄を、見たことがない。今でも、植松さんのことを忘れていないんだということは、あれですぐにわかったよ」

「でも……」

「真澄、俺は、今まで真澄と一緒にいられて、本当に幸せだった。二人の子供にも恵まれて、二人で子育てをして。本当に、幸せだったんだよ。絶対に、子育てをすることなんてないと思ってた俺に、子育ての幸せを与えてくれたんだ。もちろん、真澄という宝物と一緒にいることも出来た。俺は、十分幸せだったよ。だから、今度は真澄が幸せになる番だよ」

今度は、私が？

私だって、十分に幸せだった。子供なんて無理だとあきらめていた私の子供を、壮太さんが産んでくれたんだ。ややこしい話だけど。そして、幸せな温かい家庭を力をあわせて築き上げてきた。子供たちは、すでに結婚、一人暮らしをしていたから、夫婦だけの生活は始まっていた。

宏和が結婚すれば、心身ともに落ち着くことが出来る。これで、子育ては完結したんだと。これからは、壮太さんと二人でゆつくりとのんびりと暮らしていくものだと思いつけていた。壮太さんという時間だって、十分に幸せな時間だと言える。

それなのに、壮太さんはゆうちゃんと一緒にいたらどうかと提案している。

「何を言っているの？ これからは、私たち二人で幸せに暮らす番でしょう？」

「植松さんを見る、真澄の目を見る前までは、俺もそう思っていたよ。でも、あの目を見てしまったら、もう真澄を独り占めすることなんて出来ない。植松さんには、樹理さんの口から伝えてもらっているはずだ。真澄、俺は大丈夫だ。宏和と樹理さんが面倒見ると笑っていつてくれたんだ。何も心配することはない。植松さんの胸に、飛び込んでおいで」

すでに話は、そこまで及んでいたんだ。本気で、私とゆうちゃんをくつつけようとしている。

次の日、ゆうちゃんが我が家へやってきた。私と壮太さんとゆうちゃんの三人で、これからのことを真剣に話し合おうと言うことになった。

白髪が増えても、しわが増えても、ゆうちゃんの凛々しい瞳は変わっていない。そして、声も……。

私と壮太さんが隣同士に座り、壮太さんの正面にゆうちゃんが座った。

「突然、すみません」

ゆうちゃんが壮太さんに頭を下げた。

「良いんですよ。私のほうこそ、謝らなくてはなりません。あなたの大切な初恋の人である真澄を、独占してしまったのですから。そろそろ、植松さんに返さなくてはなりませんね」

壮太さんの手を握って、「そんなこと言わないで」と目で訴えろと、ゆうちゃんの口が開いた。

「そんなこと、言わないで下さい。昨日の夜、樹理に真澄さんとのことを言われたとき、驚きました。私に、そんな権利なんてないのに。皆さんのお気持ちは、とても嬉しいんですが、お断りしたいと思って、今日は来たんです」

ゆうちゃんも私と同じことを考えている。お互いに、長年連れ添った相手がいる。その相手を裏切るようなことをしたくはない。

「植松さんの奥さんだって、植松さんと真澄が一緒になることを望んでいるんです。私もそうだ。誰もが、植松さんと真澄の初恋を成就させたいと願っているんです。これからは、植松さんが真澄を幸せにしてやってください」

壮太さんが、ゆうちゃんに頭を下げた。ぎゅっと唇をかみ締めている。本当に、壮太さんはそれでいいのだろうと、壮太さんの心を疑った。

「止めてください。私は、断りに来たんですし……」

すっと顔を上げると、真剣なまなざしで、壮太さんはゆうちゃんを見た。

「植松さんは、今でも真澄のことを愛しているんでしょう？」

一瞬にして、ゆうちゃんの顔が凍りついた。言葉を選んでいようで、目が泳いでいる。かすかに唇を震わせて、何かを言おうとしているようだ。決心したのか、ゆうちゃんは、

「ええ、今でも、真澄さんのことを愛しています」

はつきりと、ゆうちゃんはそう言った。ずっと恋焦がれていたゆうちゃんの口から、久しぶりに聞いた愛の言葉だ。全身に流れる血液は、マグマをも超えるほどの熱を帯びているようで、私の体温は一気に上昇した。

「真澄だって、そうだろ？」

膝においていた私の手を壮太さんは、強く握り締めてそう訊ねた。

私は、涙をこらえながら、小さく首を縦に振った。

「決まりですね」

腕を組み、壮太さんは小さく、はつきりとそう言った。

私は、ゆうちゃんの家に行くことになった。これからは、ゆうちゃんと二人で暮らすんだ。小さいころから、夢見ていたことが、とうとう実現する。壮太さんには、申し訳ない気持ちでいっぱいだけど、強情な壮太さんは、私を止めることはなかった。

ゆうちゃんの家につ越す前日の夜、最後の晚餐が終わると、壮太さんは素直な気持ちを言い始めた。

「いよいよ、明日だな」

さっぱりした顔で、ビールを飲みながらそう言った。

「本当に、壮太さんは、いいのね？」

「もちろん。真澄が幸せになれるんだから。だがな、勘違いするなよ。俺たちは、これで全く会わなくなるわけじゃないんだ。たまには、顔を合わせて、宏和たちの話でもしようじゃないか。電話だって、メールだって、手紙だって出来るんだ。そう寂しそうにするな
つて」

確かにそうだ。これで、二度と会えなくなるわけじゃない。離れて暮らしても、私たちの縁は切れたりはしない。気持ちだって、離れるわけじゃない。

「そうね、そうよね。私、たくさんあなたに電話するわね。メールだって、手紙だって……」

「おいおい、そんなにむきにならなくて良いんだよ。したいときに、すればいいんだ。別に、毎日電話しなくて良い。たまにで良いんだ。自分のペースで良いんだ。それよりも、植松さんと幸せになるんだぞ」

「うん……」

壮太さんの優しさが、目にしみた。流れる前に、涙をエプロンで拭った。

「全く、涙もろくなって。めでたい日なんだぞ。お前の夢が叶う日なんだから。笑顔で、植松さんの胸に飛び込んでいけ」

そう言つと、飲みかけのビールが入ったグラスに、手酌でビールを注ぎ込んだ。そして、それを一気に飲み干した。

ゆうちゃんの家へは、壮太さんが車で送ってくれた。電車で行くと言つたけれど、壮太さんが送つていくと頑なに言い放つたので、それに従った。車中は、とても静かだった。出会ったところからよく聞いていた、BGMだけが聞こえた。

ゆうちゃんの家の前につくと、すでに玄関の外でゆうちゃんが立って待っていた。私たちはそれに気がつき、私と壮太さんは目を合わせる、軽く頷き、車外へ出た。トランクを開けて、荷物を取り出すと、ゆうちゃんが私たちのところへ近寄ってきた。

「小園さん、何て言って良いのか……」

「私なら、気にしないで下さい。それよりも、真澄を宜しくお願ひします」

壮太さんが、頭を下げた。その後姿は、とても弱弱しく見えた。後ろ髪を惹かれる思いで、ゆうちゃんに寄り添うと、壮太さんは「お似合いだ！」と底抜けに明るい声を出した。

そして、壮太さんはすぐに車に乗り込み、そのまま車を走らせてしまった。

本当に、これでよかったのかしら。そう思ったが、壮太さんにはたくさん電話をしたり、たまには家に行ったりしようと思った。

私が持っている荷物をゆうちゃんが、取った。

「中に入るう」

ゆうちゃんに促されて、私たちはゆうちゃんの家の中に入った。

ゆうちゃんは、ずっと同じ家に住み続けていた。遠い昔に来た家だ。あの当時と比べると、古びた感じはするが、雰囲気は全く変わっていない。

玄関で、靴も脱がずにあたりを見回していると、ゆうちゃんが後ろから抱き付いてきた。

「ずっと、こうしたかったんだ……」

ゆうちゃんのぬくもりが、じんじんと伝わってくる。振り向いて、ゆうちゃんと強く抱きあった。

「マーちゃん、愛してるよ」

「私もよ、ゆうちゃん」

お互いに、目に涙をたっぷりと浮かべながら見詰め合つと、熱い口付けを交わした。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1935c/>

あなたと私の赤い糸

2008年11月7日07時14分発行